始

特220
60

愛知縣教育會編

愛知縣銃後美談集

第二輯

發行　川瀨書店

緒　言

支那事變千載の記念とし、且つ教育の資料とし、青少年修養の鑑とせんがために、わが愛知縣教育會は、曩に昭和十三年七月「愛知縣銃後美談集」を編纂發行した。今回發行のこの第二輯は其の後の蒐集資料によつて編纂したものである。

本資料は本縣學務部長の通牒によつて、昭和十四年二月二十日迄に各小學校長が報告せしものであるから、本輯中に本年とあるは昭和十四年をさすものであることを斷つて置く。

本資料は小學校長報告書二百餘篇の中より、本會社會教育調査部に於て、百篇を選出して編纂したものである。

編纂方針は前輯と同樣であるが、今回は內容を分類して、成人(男)・成人(婦人)・青年(男

女）・少年少女の四部に分けて掲載した。

文章は、體裁統一上、其の内容を損せざる程度に、學校長提出の原稿に多少の訂正を加へたものがある。

本集は個人の行爲を表彰するに重きを置き、團體が主體となつて施行した行事に關しては、他日調査發表の機あるを思ひ、特別なものゝ外は本書に掲載をば差しひかへた。

本書編纂にあたり資料を賜はりし、本縣學務部並に小學校長諸君に深甚なる謝意を表す。

昭和十四年十二月二十五日

愛知縣教育會

愛知縣銃後美談集　第二輯

目次

成人（男）之部

一、小學校長の應召……一頁
二、出征少尉の父……四
三、久平さんの禁酒……七
四、十六年間の日掛け貯金千二百圓献納……一一
五、床屋さんの新聞慰問……一三
六、勇士の井戸……一五
七、感謝に輝く日の丸の旗……一七
八、寫眞報國の局長さん……一八
九、老兵會長柳原忠兵衛……一九
一〇、銃後の素封家と周圍の人々……二三
一一、一家をあげて銃後の奉公……二六
一二、增しゆく祈願の札……二七
一三、戰線から送る勇士の眞心……二九
一四、匿名の贈物……三一
一五、藥師如來堂の改築……三二
一六、死を秘して我が子を勵ました軍國の父……三三
一七、熱誠なる不斷の慰問祈願……三五
一八、篤志の牛乳……三七
一九、下帶五百本の献納……三八
二〇、債券當選の壹千圓をすつくり献金……四〇
二一、二萬體の勝守と一百貫の干草……四二
二二、銃後の先鋒……四三
二三、聰の鐘……四四
二四、恩情に泣いた勇士の恩情……四六
二五、敬神思想の涵養に努む……四七

二六、八十五翁の赤心……四八
二七、貰き奉仕的事業……五〇
二八、献身的慰問……五三
二九、鑑となつた鏡……五五
三〇、彩管に心血を注ぐ銃後の畫家……五八
三一、使丁の隣人愛……六〇
三二、熱誠あふるゝ遺家族の慰問……六三
三三、公務の名譽……六四
三四、少年團の指導……六五
三五、週間加茂時報の慰問……六七
三六、老人忠九さん……六八
三七、模範部落の指導者……七〇
三八、數々の献納……七一
三九、物資愛護箱……七二

成人（婦人）之部

四〇、知事から表彰された銃後の母……七三
四一、織手に握るハンドル……七六
四二、自轉車で行商に出る銃後の妻……七八
四三、朝夕の水垢離……八〇
四四、銃後の妻の奮闘……八一
四五、噫武人の妻……八六
四六、天晴れ勇士の母……八七
四七、夫の應召を驚まし病妻遂に死亡……八九
四八、銃後の妻と八臺の織機……九二
四九、銃後の農事を引き受けた若嫁……九三
五〇、路上の鐵骨を蒐めて……九五
五一、老の腕よく銃後を護る……九六
五二、慰安の花環……九八
五三、武勲の蔭に涙あり……九九
五四、老女の赤誠……一〇一
五五、血染の日章旗……一〇二
五六、應召兵の妻店舗經營……一〇三

五七、お婆さんの赤誠……一〇四
五八、上等兵大谷春男の叔母……一〇五
五九、工場に働く銃後の妻……一〇八
六〇、熱誠銃後の夫妻……一〇九

青年（男女）之部

六一、友に代つて老母をいたはる……一一一
六二、あゝこの軍國の乙女……一一三
六三、機織に咲く二青年の花……一一六
六四、寫眞で慰問……一一九
六五、打揮ふ向槌……一二〇
六六、町の戰士七人娘……一二一
六七、區民ラッパの起床……一二三
六八、健氣な軍國女性……一二四
六九、團風刷新……一二六
七〇、八人の女子青年……一二七

少年、少女之部

七一、社殿に輝く少年の赤誠……一二九
七二、孝行少年肴屋……一三一
七三、徹夜の自轉車預り……一三二
七四、家を護る銃後の少女……一三四
七五、八少年の日參……一三五
七六、日參團團長長江少年……一四一
七七、二百の少年少女日參……一四五
七八、兄弟三兒童の節約献金……一四五
七九、銃後は御心配遊ばすな……一四六
八〇、小使錢を蓄積して應召家族に送る……一四七
八一、慰問數十回……一四九
八二、事變以來の貯金……一五一
八三、社頭に祈る三少年……一五三
八四、鰯賣り兄弟……一五六
八五、少年の牛乳配達……一五七
八六、健氣な少女……一五八

八七、二人の兄を聖戰地へ……一五九
八八、父に後顧の憂なからしむ……一六〇
八九、お菓子も儉約して銃後献金……一六一
九〇、讀み終つた新聞を集める三少女……一六三
九一、手洗所の清淨……一六四
九二、恩師の武運長久祈願……一六五
九三、記念の事變戸棚……一六六
九四、香花を捧ぐる少女……一六七
九五、銃後赤誠不滅の金字塔……一六八
九六、汗に報いられた謝禮の献金……一七〇
九七、日參子供の會……一七一
九八、感心な少年團……一七二
九九、幼き誓……一七三
一〇〇、小さき手で社前に額づく……一七六

愛知縣銃後美談集

成人(男)之部

一、小學校長の應召

丹羽郡扶桑尋常高等小學校長長谷川惠二氏は本年〇〇〇歳の身を以て、陸軍歩兵中尉として北支〇〇地に重要任務に服して居られるが、氏の應召に際しての態度こそ眞に教育者の名を恥かしめぬものと言ふべきであらう。氏は大正二年本縣第一師範學校卒業後大正八年まで訓導として勤續せられたが、不幸病氣の爲め退職の止むなきに至つた。然し專ら靜養の甲斐あつて翌年には全快して義務年限内に退職した故を以て、二十七歳再び徴兵檢査

を受け甲種合格の榮を擔ふ事が出來た。そこで一年志願兵として若い人達と共に軍隊の教育を受け、除隊後再び教壇上の人となり、大正十三年少尉に任官された。其の後累進して小學校長となり青年學校長を兼ね、後には帝國在郷軍人會丹羽郡聯合分會長を兼ねて歩兵中尉に陞進し、軍事教育に貢献する所大なるものがあつた。

一昨年事變勃發して次々に勇士の重大任務につかれるのを見て、氏は常に口癖のやうに「何時どんな命を受けるかも知れぬが、後に迷惑はなるべくかけない様にするつもりである。」と言つて居られたが、待望の日は來た。〇年〇月〇〇〇日の午後、家内の人より電話で召集令狀の屆いた事を聞き、平然として、「只今待望の召集令狀が屆いたさうです。」といつて首席訓導を呼び、鞄の中から一通の書類を取出し、「かねて今日ある事を思つて用意しておきましたから後に迷惑のかゝらぬ様之を出して下さい。」と差出されたのは退職願であつた。首席訓導はその立派な用意に感激しながらも、まだ入隊されない前であるからどんな都合になるかも知れぬ。それ故入隊の通知のある迄その儘預る事にした。(その後それは當局に於て應召者優遇の趣旨に反するといふので受理されなかつた。)そして色々御準備も

あるでせうから早くお歸りになつては……と勸めたが、もう別に準備などはない、何時でも行ける。といふので平日通り晩まで執務して歸宅された。その態度を目のあたり見た職員一同は言ひ知らぬ感にうたれて思はず頭が下つた。

校長先長が應召されるげな。といふ噂がパッと廣がると、日頃各方面から人格者として尊敬されて居られたゞけあつて、我も〳〵と心からなる餞別を贈つた人はなか〳〵に少くなかつたが、女子青年團員の某女等二人の如きは、夜の家業の暇を利用して、百方奔走して千人針を急にこしらへて送つたり、乙女の眞心をこめた血染の日章旗を贈つて氏の心をいたく感激せしめた。

越えて〇月〇日の朝、愈々校長先生の晴れの門出を送らうと學校さして押し寄せる村人は校庭に滿ち〳〵て未曾有の盛觀を呈したが、氏の元氣に滿ちた「…私は既に一度死んだ體であります。今日まで命のあつたのは全く儲け物であります。今度畏くも陛下の御召に預つた上は身命を擲つてあくまで御奉公して參ります。」との挨拶と應召に對する平素の準備と、職を辭してまで君國に報ぜようとせられた其の意氣は、教育者とは言へ實に立派な

ものでうるはしい乙女の純情の贈物と共に聞く人をして感動せしめてゐるのである。

——丹羽郡扶桑尋常高等小學校——

二、出征少尉の父

海部郡佐織町大字淵高新田、祖父江信秀氏は、嘗ては、教育者として、教化の道に盡瘁し、老後を村政、殊に教育事業、社會教化事業に力を致してゐられる。

時間尊重、防空思想普及、等の必要上から村の小學校へ、時計、サイレン、等を寄附されたのもつい先頃の事でその一端とも言へやう。

今回端なくも日支風雲急を告ぐるや、氏の養嗣子、彰壽氏（現小學校員、青年學校指導員兼務、陸軍少尉）は、〇月〇日召に應じて出征、彼の杭州灣敵前上陸部隊に參加されたのである。

祖父江少尉の召集は極めて火急であつた。寸刻の猶豫さへ無い程であつた。軍服に身を

かためた少尉は、門口に立つて、威儀を正し、老父に一禮、「出征します。決して家名を汚しません。御體を御大切に……」。「よく言つて下れました。では元氣で……」。少尉は再び口を切つた。「お父様御願ひがあります」。「何にッ、お願ひが……此の期に及んでお願とは……」。老父の顔はサット變つた。「ハイ外では有りません。出征後、私の部下の家庭の事ですどうか時折見舞つてあげて下さい」。老父の顔は緊張した。「よしッ、引受けました」。

これが老父信秀氏と、祖父江少尉の、父子最後の會話であつた。少尉は斯くして雄躍征途に上つたのである。そして〇〇名の小隊長として、江南の戰塵を浴びて、各地に轉戰したのである。

老父は少尉最後の願ひを其儘に、〇〇隊勇士〇〇名の出生地を調べたのである。そして遠近を問はず出張し、一々家庭を訪れ懇ろに慰問し、家庭の情況を調査し、一方勇士の近況を傳へて家族を激勵するなど、懇切を極めた。

家庭訪問の結果は、つぶさに其の情況を認めて戰地の勇士に通じ、勇士をして後顧の憂なく、安んじて君國の爲めに御奉公の出來得る樣に、よく老軀東西奔走、夜を日についで

活躍を續けたのであつた。

少尉が血腥い戰場にあつて、部下の身の上と其の家庭とを思ふの眞情は、老父への通信の節々に伺はれた。

「○○○の戰で部下に負傷者を出した。○○○君は病氣で目下○○○○病院で加療中だが、前進又前進で見舞ふ事が出來ぬ。通信も思ふ樣に出來ぬ」。こんな手紙を受取つた老父は少尉に代つて傷病兵へ慰問狀を出し、容態を尋ねては、其の消息を戰地の少尉に通じたのだつた。

伊吹颪に雪をまじへて寒い朝、雪どけのぬかるみを暗い夕、思ひを江南の地に走せ乍らの訪問に、疲れて歸宅した信秀氏は、夕食もそこ〳〵に、傷病兵へ、家庭へ、勇士へ、少尉へ、ペンを走らせるに相當忙がしかつた。時には深更二時に及んだ事さへあつた。

市内地の訪問は、利用するに電車あり、バスあり、で便利であり、時間もかゝらなかつたが、郡部の山に近い農村は、利用する機關少くて、時間もはかどらず、よつて一策を案じ、自轉車屋を尋ねて、自轉車を借り受けて活動せられたとの事である。尙ほ當時一月半より信秀氏夫人は、病の床に就かれたのであるが、氏は面にも現はさなかつた。病める夫人と愛孫三名と家事一切とを、娘である彰壽少尉夫人に託して、よく活動を續けたのだつた。彰壽夫人は、戰場に夫を送り、病める母に孝養を怠らず、三人の子の母としてよく愛育しよく家政を濟へられた。眞に、此の父にしてこの子ありの感を深くせざるを得ないものがある。

其の後、信秀氏夫人の病は癒え、間も無く彰壽氏も武勳輝かに歸還された。これ一に、一家擧つての至誠が天に通じた賜であらう。

——海部郡西川端尋常小學校——

三、久平さんの禁酒

中島郡萩原町に屑物買をしてゐる伊藤久平さん(五三)は、人稀な大酒家でこれが爲に全財産を傾けてしまつた。それのみならず此の酒の爲にどれ程、粗忽を仕出かして人に迷惑をかけたことか知れなかつた。けれども根は正直な人で、其の上義俠心にも富んで居た。斯

様な長所と短所が有つた。久平さんには息子が二人有る。兄は二十四、弟は二十一、二人共親に似ぬ苦勞人で有つた。二人は「村に對しても申譯がない、どうか酒ばかりは止めて下さい。」と、幾度諫言したか判らない。久平さんは其の度毎に、「くだらぬ事を親に言ふな。」と、憤怒をます許りで、酒場から遠ざからうとはしなかつた。息子たちが年に一二度奉公先から父をいたはらうと思つて歸つて來ても、一向に喜ぶでもなく、さつさと酒場へいつてしまうのであつた。けれども兄弟は少しも腹立つ事もなく、父が歸つて來たなら溫い御飯を差上げようと、自分は殘飯をも厭はず食べて、夕餉をたいたり、汚れた着物を洗つたりして居る。時には父の歸りの遲いのを心配して、わざ〳〵寒風の中を出迎へに行き、ひたすら孝養を盡されたことも有つた。近隣の人達も此の孝子の眞情には、全く貰ひ泣をして居た。たま〳〵支那事變起り、此の孝行息子の兄の久義さんの許へ召集令狀が來た。然しさすがは久平さんも軍國の親だ。「久義しつかりやつてこい。乃公の事等心配するな。戰地で充分活動してこい。判つたか。」と、日頃の義心茲に甦り、決然と叫ばれた。此の時の久平さんは從前とは全く別人のやうで、嚴父其のものだつた。「お父さん行つて來ます…

どうか酒ばかりは止めて下さいよ。」と、久義さんも嚴然と意中を述べられた。さすがに此の眞情が胸に刻まれたものか、「うん判つた、くよ〳〵して職務を忘れるな。」と應答せられた。歡送場で久義さんは村人達にくれ〴〵も父の身を賴み、男子の面目昂然として此の聖戰の目的を貫徹すべく、絶讃の聲に送られて出征せられた。此の最後迄親の身を案ずる孝子の心情に誰一人として暗涙に咽ばぬ者はなかつた。實にあの歡送會は感泣的なシーンで有つた。日常の久義さんの孝養振を知悉して居る者は、「今度は久平さんも酒をやめるだらう。」と口々にいつた。これを聞いた久平さんも良心に恥ぢて面目なげに首を垂れて居られた。

然るに以來數ヶ月經ても久平さんは一向に大酒を止めない。天は見るに視かねてか遂に天誅を加へられた。それは當家の火災で有る。此の時私は或る集會が有つて參列してゐたが、誰かの知らせで狼狽し且つ驚愕しながら駈つけた。時すでに遲く火の手は殆ど廻つて居た。然しみす〳〵家財道具を燒失させる事は出來なかつた。飛び込み飛び込み私は久平さんと一緒に働いた。久平さんの顏は宛然、鬼夜叉其のものであり、且つ狂亂の體だつた

火の手は殆ど廻つて、もうとても入れなくなつた。其の時突如此の火焔の中へ身を投じた者が有る。「噫々無謀な。」と誰かが叫んだ。何をするかと視ればいきなり三十餘貫も有らうと思はれる佛壇に手を掛け、尙其の上に懸げて有つた額面に手を掛けたと思ふ瞬間、惡鬼の樣に目を血走らして表庭眼掛けて飛出した。「あゝ久平さんだ。」額面はと見れば愛兒久義さんの出征當日の凛々しい勇姿の寫眞であつた。久平さんはばつたり大地に土下坐して手をおろすや、「久義濟まん。」と額に向つて男泣きに泣かれた。その內に風が凪いであの物凄い火の手は不思議にも下火となり全燒に到らずして濟んだ。此れを見たものこれ全く佛壇上に飾つて有つた、息子久義さんの守護ではなからうかと思はぬものは無かつた。朝宮日參團は心許りの見舞金を出征遺家族慰問として贈呈した。此の時、久平さんの顏には、初て前罪を悟つた悔悟の色が現はれ、「有難う御座います。」と聲をうるませて喜び、且つ罪を謝せられた。以來久平さんは斷然禁酒して居られる。

——中島郡萩原尋常高等小學校——

四、十六年間の日掛け貯金千二百圓を献納

葉栗郡葉栗村光明寺織物業平松誠一さんは、今から十六年前徵兵檢査に不合格となりこの不名譽をいつかは回復せんと、好きな煙草をきつぱり止めて、一日二十錢の日掛け貯金を思ひ立ち、これでお役に立てる日を待つてゐた。以來十六年間一日も缺かさず續けて來たが、これが積り積つて千二百圓となつたので、「今日こそ私の身替りに」と、村の軍事援護會基金として千圓、同字の軍人後援會費として二百圓を、それ〳〵同村役場に寄託した。同氏は、「あの時の無念さは、どんなでしたか。いつかお役に立つ時もあらうと、やりかけた貯金が、今日からして出征軍人のために役立つと思へばこんな嬉しいことはありません。時局柄この貯金は、今後も續けて行くつもりです。」と朗かに語つた。

——昭和十三年八月十一日の名古屋新聞記事に據る——

五、床屋さんの新聞慰問

床屋の梅本宮次さんは、支那事變勃發以來村内應召兵の皆様へ順々と新聞紙を送つて慰問に努めて居られる。其の數實に五百餘回に及ぶと云ふ。簡單な事ではあるが、長期にわたるその努力は、實に國民精神總動員の一實踐要目たる出征軍人慰問への不動精神の發露でなくて何であらう。又この新聞を戰地に於て受取られた出征軍人の喜び感謝――それが凝つて偉大なる精神力の糧ともなる事を併せ思ふ時、實に梅本さんの行爲に感激を覺える。何百通かの戰地よりの書面を見るに、皆其の厚意の有難さと、戰地に於て鄕里の樣子を見聞する懷しさと、最後に氣力を込めての奮鬪努力の覺悟が記されてゐる。一部の新聞紙が鄕里より遠くはなれた大陸の奥地に、血と汗にまみれ又は酷寒と戰つて死を鴻毛の輕きに比して、興亞建設東洋平和の爲に活躍されてゐる勇士の手にわたる時、それは全く一部の新聞紙にあらずして、魂と魂との交流となるのである。偉大なる働きかける力への價値的刺戟材ともなるのである。梅本さんの行爲は、實に擧國一致の美的行爲の一表現でなくて

何であらう。

かしこくも明治天皇御製に

國を思ふ道に二つはなかりけり
軍の場にたつもたたぬも

との御精神の生きた體驗者であると云ふも、過言ではあるまい。

「親親たれば、子子たり」と言はんか。梅本さんの子供さんも、よく父の精神を汲んで度々慰問文を出征軍人に送つてゐる。ある時の戰地よりの返書に

「梅本君、明ケマシテオメデタウ、又オ正月ガ來マシタネ。長ラク御無沙汰シテ居テキツト心配シテ居テクレタデセウ。九月末懷シイコノ兵營ヲ立ツテカラ〇〇〇日目デ、又歸ツテ來マシタ。今度ノ戰鬪コソホントウニ君達ニ見セタイヤウナ事バカリデシタ。零下何十度ト言フ雪ノ中ヲ、或ハ恐ロシイ谷間ヲヨヂ登リ、或ハグサ〳〵ト砂漠ヲ駈ケ廻ツテ我々任務ノ遂行ニ力ノアル限リ奮鬪シ續ケマシタ。支那ノ土地ニ渡ツテカラ丁度一ケ年ニナリマス。ソシテアラユル戰鬪ニ參加シマシタガ何ト言ツテモ今度ノ戰ガ一番キツカツタ樣

ニ感ジマス。ダガ然シ安心シテ下サイ。ソノ長イ戰鬪ニ一ツノカスリ傷モナク働クコトガ出來タノデアリマス。コレモ君達ノ眞心込メタ後援ノ賜ト心カラ深ク深ク感謝イタシマス一月モ北支ノ空ハ零下二十八九度マデ下ツテキマス。水筒ノ水ガ殘ラズ凍ツテ飲ム事モ出來ナクナツテシマヒマス。寒サハ是カラモツト〳〵募ツテ行キマス。零下四十度ノ物恐ロシイ寒サガ我々ノ身ノ上ニ襲ヒカヽツテ來マス。去年一回體驗シタトハ云ヘ、何トナク物恐ロシク感ジラレテ來マス。然シ遙カ千里ノ故郷ニハ君達ガアノ冷タイ朝モカマハズ鎭守ノ杜ニ日參シテキテ呉レルト思フト、イヤガ上ニモ奮起セズニハ居ラレマセン。コノ次ノ戰鬪ニハモツト〳〵戰フ覺悟デアリマス。學校ノ先生ヤ皆々樣ニヨロシク傳ヘテ下サイ。サヤウナラ。」

實に家族一心となつた銃後美談としての、床屋さんである。昭和十四年二月十一日紀元節の佳節を期して、大濱警察署銃後奉公會長より感謝狀を授與されたのも故あるかなである

須らく魂と魂と交流する時にのみ、力强くも美はしき人生の華は咲く。

——碧海郡明治第一尋常小學校——

六、勇士の井戸

昭和〇〇年九月中頃北支戰線に活躍中の鄕土の勇士刈谷町大字刈谷字緒川町出身上海派遣軍武田部隊鳥居隊本部軍醫見習士官某氏から、左の書狀と共に金百圓也が屆けられた。

（書狀內容）

「同封の金員は僅かですが私の寸志として御受納下さい。當地にあつて支那の子供の卑屈な無氣力な不健康な眞に哀れな狀態を見るにつけ尙更日本の幸福な兒童の事を考へます現實に東洋を支配し世界平和を双肩に擔ふ日本の次の時代を引き受ける小國民の教育程重大な事はないと存じます。徒らに小勇血氣にはやつて無益な敵愾心に身を灼く時ではありません。軍國多事の際と雖も教育のことに御軫念下された明治大帝の大御心を體して陛下の小國民の教育に一段と御健鬪願ひます。

承れば母校は舊城趾のことゝて高燥な上に、この暑さに井戸が御不自由とのこと兒童諸君の爲めに憂慮に堪へません。北支方面の水の缺乏には殆ど閉口してゐます。內地の水の

有難味をつく〳〵偲ばれますについては是處に御送り致しました金員で、御校の井戸を掘つて下さい小生は水に絶大な關心を持つてゐる者です。但し小生の名は絶對に祕して置いて下さい。」

學校では此の陣中からの送金に感激して早速最も不便をして居る一、二年生教室の傍に井戸を掘り、洗足場、貯水所まで作つて、これを「勇士の井戸」と命名して、全校兒童の日々感謝の念に浸りながら、此の水を大切に使用して、戰場の勇士が水の缺乏に耐へて奮闘せらるゝことを推察して、銃後の務めに努力させて居る。

尙此の「勇士の井戸」竣工の報告と、兒童の感謝の文とを戰線の氏に送つた時、特に將來兒童教養の資としたい爲、芳名の發表を願つた處、絶對に祕して欲しいと云ふ、左の返信が來て一層感銘して居る。（書狀內容）

「（略）……此の金の性質は小生出征以來戴いたお金の中充分自己の用を辨じた殘りの一部ですから國家のものです、決して小生の私にする義理合のものではありません、どうぞ吳々も無名の有志よりとして御取計ひ下さい……（略）」

學校では氏の御心を尊重して、たゞ「勇士の井戸」として毎日感謝と共に銃後の務を完うする大切な教育資料として居る。

——碧海郡龜城尋常高等小學校——

七、感謝に輝く日の丸の旗

谷の遠近部落の此處彼處に翩飜として飜へる日の丸の旗。これこそ名譽の家を物語る出征家族の標識である。

雨に晒され風に吹かれては、赤は色あせ白は黑ずみて見苦しくなるので、村尙武會としては汚れないうちに之を新しい旗と取り換へることにしてゐる。

丁度第二回目を取り換へようとするやさきであつた。額田郡下山村大字田代荷物自動車業柴田斧吉氏（三三）は、我皇軍の勞苦を思ひ且つは出征家族の方々の涙ぐましい銃後の守りに感激して、「自分は皆さんと同じやうにお國の爲に出征もしないし、又家からも一人も軍人として出てゐないから、せめて此の旗なりと出征家族へ贈つて、その名譽を表象し、お

互にこの旗を見て兵隊さんに對して感謝の心が起したいから、どうか差し上げてもらひたい。」と。大國旗五十枚を寄贈したので、出征家族の感激は勿論村民一同この美舉を稱讃してゐる。

——額田郡下山尋常高等小學校——

八、寫眞報國の局長さん

歡呼の聲も額田郡河合村の山村にも響きわたる時が來た。大命を受けて聖戰に參加するものにとつて、記念として家族に與へておく唯一のものは、自己の勇壯な軍服姿であると思ふ。この農山村に生を受けたものでは、岡崎までいつて自己の英姿を寫したいと思つても其の隙がなく、又自宅まで寫眞師を呼ぶことも思はしく出來ぬ場所である。

こゝに大命を受けた勇士の爲に銃後を固め、家族の爲にこの望をみたす天使があつた。それが河合郵便局長杉山房吉氏(六〇)だ。氏は寫眞をとるのを唯一の樂しみとしてをられる天眞爛漫な子供を見ては「寫眞をうつしてやらうか」と氣輕にとつて下さる。

この聖戰が始まるや、直ちに寫眞報國の信念に燃えて、村内出征者の寫眞を一人殘らずうつし、出征者並に家族に惠與されてゐる。尙家族の寫眞を撮影して戰地に送り慰問されること數ふるに暇がない。如何に自己の趣味とはいひ、全部の出征者に對してのこの行爲は村内唯一の銃後美談であらう。

特に今日の如く寫眞材料の統制の折にもかゝはらず、以上の如き美談、又は本村出身にして名譽の戰死者本間信一氏に對しては四切大の引伸四枚を贈呈した。其の技術は專門家も及ばない手ぎはである。人呼んで「寫眞局長さん」といふ。

——額田郡生平尋常小學校——

九、老兵會長柳原忠兵衞

支那事變勃發以來全國民の愛國熱は、津々浦々に至るまで、彌が上にも沸き返り吾れ劣らじと、第一線に活躍する勇士の留守宅を守る所謂、銃後美談は各地に限りないが、此處

に渥美郡赤羽根村大字越戸柳原忠兵衛氏（六三）は軍人狂人と云はれる程、軍事に關する事となると、全く狂人的に何から何まで世話を燒いて活動して居る。

柳原氏は過ぐる日露の役に若き少尉として出征し、各地に歴戰赫々たる武勳を建てた勇士であるが、爾來推されて軍人會、尙武會などの役員を永くつとめられ、一心に盡瘁せられた。尙素封家であるため、軍事に關する事になると率先して寄附を申出で、氏の力によつて成された施設や事業は、枚擧に暇なしの有樣である。

今回の事變が起るや「先づ銃後の守りは吾等の手にて」と日露の歴戰老勇士を始め、鄕軍を終つた老兵に呼びかけ「老兵會」を創設し、推されてその會長となつた。

「若い者は第一線へ、吾等は銃後の固めに」とて、遺家族の世話に、出征軍人の慰問に激勵に、又武運祈願に全會員を引廻して、大童となつて文字通り懸命に盡くしてゐる。

昨年自費を以て、皇太神宮を始め、熱田、鹿島、香取の武神は云ふに及ばず、東海、近畿、四國、九州等全國の主なる神々を巡拜し、皇軍の武運長久と鄕土の出征軍人の武運を親しく祈願して、守り札を出征軍人家族の數だけ求めて歸り村内出征者〇〇名の家族に贈り尙家族の慰安をするために、自宅に招待して饗應をなしたことが數回に上る。

又村内戰死者の遺族には、自宅に僧侶を招いて英靈の追悼會を催し、遺族には饗應をなして心からの慰安をなした。

應召兵のある場合は、自分の字は勿論のこと、學區内（三大字）の者にも、もれなく餞別を贈呈し、尙送迎にも必ず自分の字のみでなく（自分の屬する字のみ送迎する習になつてゐるが）全學區内の者に對しても一度も缺かしたことがない熱心さである。

其の他時局の認識を深め、又は皇軍奮戰の有樣を村民に知らしめる爲めに、自費を投じて講師を招き、軍事講演會を開いたことも一再でない。誠に美しき銃後の華と云ふべきである。

同村では今回時局重大の折柄、鄕軍の一大緊張强化を計るの必要に當り、氏の如き熱と力のある者を適任者として推薦し在鄕軍人會長に推された。

齡耳順を超ても尙壯者を凌ぐ意氣と抱負を以つて「何にまだ若い者に負けるものか」と張り切つた元氣で、東に走り西に飛んで「軍人狂」を以つて自任して銃後のために席の温

る暇なしの有様である。

一〇、銃後の素封家と周圍の人々

支那事變が勃發して間も無い昭和十二年八月二十日、榊原吉右衞門氏(五五)から、大字區長、所轄警察官、小學校長宛、當字内出動兵家族扶助資金として協議の上使用するやうにと、金參百圓の寄附を願ひ出でられた。一同はこの御通知に接するや非常な感激を以て早速集合して協議會を開いた。そして毎月御思召しの資金を携へて遺家族を慰問して御渡しする事に決議をしたのである。尙其の上農村の事とて御留守の家もあり、皆さんに十分その意を御傳へする事が出來ない心配もあるので、資金の包紙へ毎回簡單な慰問文を附けて幾分なりとも御芳志の意義を深からしめんとしたのである。其の二三の例を擧げたいと思ふ。

1、昭和十二年十月一日

榊原吉右衞門殿
出動兵家族慰問　御芳志

謹　言

今次の事變に際して、榊原吉右衞門殿には特に出動兵御家族の御心勞を察せられまして洵に有難い厚い御芳志に接しました。唯々深い感激に堪へません。茲に謹んで御趣旨を體して協議の上出動兵家族慰問として御芳志を相傳へ之に呈する次第であります。

2、昭和十二年十一月二日

明治天皇の御製謹寫

子等はみないくさのにはに出ではてゝおきなやひとり山田もるらん

榊原吉右衞門殿出動御家族慰問資金傳達

謹　言

□菊花の好節愈々御壯健で明治節のよき日を御迎への事と深く御喜び申し上げます。謹んで明治大帝の御高德を仰ぎ擧つて奉祝致したいと存じます。

此の時に際し皇軍の武威は益々揚り死守したる大場鎮の堅城を見事に占據し北支戰線も破竹の勢を以て攻略しつゝあるは洵に悦びに堪へません。出動勇士の決死の奮鬪に對し深甚なる感謝を致し更に武運の長久を赤心こめて御祈り致す次第であります。

□稲垣嘉太郎、岩崎竹一、稲垣盛一、三氏は奮戰激鬪、皇軍の精華として忠烈なる御戰死をなさいました。謹んで武勳を嘆稱し深く敬吊の誠意を捧ぐる次第であります。

3、昭和十二年十二月十日

今般の事變に際し畏くも皇后陛下より思召を以て、戰死又は殉職官吏に對して御菓子一折宛御下賜の旨御沙汰あり左記の如き有難き御歌を拜し奉る。

やすらかにねむれとそおもふ君のためいのちさゝけしますらをのとも

榊原吉右衞門殿出動遺家族慰問資金傳達

謹　言

嚴しい寒氣が訪れて來ました。命捧げし御愛息御夫君御兄弟の御身上を思ひつゝも遺家族の皆々樣、御壯健でお家をお守りの御事と存じます。零下三十度と言ふ北滿の果にソ

聯と睨む勇士の姿、零下二十度といふ北支の山岳に暴支を壓して野營する勇士の身上、抗日首都南京を陷れて感激の眸で包む前線將士の感慨は如何に、今日までの勇猛果敢なる肉彈攻擊、息もつかせぬ猛攻は燦然と世界に輝きわたつてゐます。

それにつけても今日までの遺家族のお方々の御心勞を察し、お慰めの言葉もありませんさて事變の解決は尙今後にあるを思ふ時更に又一段の決意を要します。益々忠誠の意氣に燃えて武運の長久と國威の發揚を祈る次第であります。尙御遺族皆々樣の御健康を併せて御祈り申上げます。

尙これのみに止まらなかつた。其の後かくれたる美しい御後援の數々を聞知するに至つたのである。其の篤行の一二を感激の餘り擧げたいと思ふ。即ち事變以來の出征家族の總年貢量を思ひ切つて減ぜられた事、又應召時常に多額の金員を小作者と、一般とに餞別として贈與せられつゝあつたこと、又繪筆或は、和歌を以て戰死者の遺家族を慰められつゝあること等々幾多の美事を聞くのである。

實に銃後美談の華とも言ふべきを信じて、深く敬意を表して茲に記した次第である。然

しこの事たるや極秘裡に行はれつゝあるもので、今日まで發表を差しひかへてゐたのであるが唯々感激の餘りこの稿を草するも尙深く叱せらるゝを恐れる次第である。

——碧海郡明治第五尋常小學校——

一一、一家をあげて銃後の奉公

二子を戰線に送り其の中一人を漢口攻略の華と散らしめた名譽の家杉浦茂左衞門氏（五六）の一家は、銃後の家庭としても又龜鑑の家である。

即ち茂左衞門氏は町長として家事を擲ち、多端なる町政及び銃後後援事業を主宰し格別の盡瘁を致されてゐるが、かゝる中に風雨の厭もなく續けられる氏の日參も尊い。尙寫眞技術の巧みな氏は、遺家族慰問の際、出征者遺族の幼兒の寫眞を撮影し、戰地へ發送することを忘れない。又、公務を忽せにしない氏は、去る二月一日、故夫君の遺骨を家へ迎へたが、定例日二日の町自治會三日の教育審議會の何れにも出席し居合はせた人々を深く感激せしめた。氏の夫人のぶさんも、これまでは顏も知られぬ程であつたが、事變はじまるや、町國防婦人會長として或は出動歸還軍人の歡送迎、或は國防婦人會役員會主宰に献身的努力を拂はれてゐる上に、個人として町內出動兵全體に對して毎月順次に慰問狀及び新聞を送り戰地から深く感謝されてゐる。

——幡豆郡平坂第二尋常小學校——

一二、增しゆく祈願の札

幡豆郡吉田町大字小山田神明社及同町富好八幡社に參拜する人が奇異の思をしたのは中央に皇軍將士鄕土出身將兵祈武運長久とし、兩側に小山田及富好出身の出征將兵の氏名を印刷せる札が何十枚も重ねて拜殿の柱に貼られ、然もそれが一日一日と枚數の增して行くことであつた。

人々は誰の行かと不思議に思つて種々噂をしあつた。それが本年になつて漸く小山田在住の岩瀨松太郎さんといふ事が判明した。岩瀨さんは茶や生花の師匠として各地に出張し

て教授してゐられ、大層お忙しい身分の方である。年は三十五六歳、見るからに溫和な人である。岩瀨さんは一昨年事變が勃發すると、毎朝小山田と富好の氏神樣に參拜して皇軍將士の武運長久を祈つてゐられた。而し雨の日風の日には山の上の高い石段を登るのが憶劫に思はれ、時には參拜に行かぬ日もあつた。事變は愈々進展して昨年南京も落ち、武漢三鎭も時間の問題となつた。皇軍將士の捨身奉公の御蔭に依つて我々銃後の者は枕を高くして眠る事が出來る、事變が長びくにつれて自分の心にゆるみが出ては申譯がない。かく痛感した岩瀨さんは、朝は暗い中に起き夜は遲くまで自己の職に勵むは勿論、將兵の武運長久祈願を怠り勝ちの自分を顧み、こゝに發願して今より百日間どんな事があらうと小山田、富好の二社にお詣りしようと決意し、さきに記した參拜のしるしの札を印刷し、最初の一週間は心の弛まぬやうにと暗い中に起きて清水を浴び、身を潔めて參拜された。さうして毎朝人の姿の見えぬ暗い中に參拜され、昭和十四年一月二十二日、百ヶ日詣りの願を果された。然し其の後も同樣にして毎日毎日參拜をつゞけて居られる。家へ歸ると祖先の靈に參拜し食事を濟まして仕事に就かれる。岩瀨さんは「家が貧しいので金や物を献納することは出來ないので、せめて自分の誠心を捧げたいと云つてゐられる。

――蟠豆郡吉田第一尋常小學校――

一三、戰線から送る勇士の眞心

裏の八幡樣の森に朝から蟬の聲が喧しい。じつとしてゐても背を汗が傳ふ。今し學校の門をかけ聲勇ましく、リヤカーを曳いて駈け出す兒童の群、手に手に握る草刈鎌、白の運動シヤツも輕快に。

「おい、今日は負けるな。」

「よし、僕等は五十貫刈るぞ。」

「走れ！走れ。」

喚き乍ら一臺のリヤカーをとり圍んだ十二三人づゝの群が思ひ〳〵の方へと走る。やがて川の堤防へ着いた一團、早くも草刈りが始る。

「さあこの匪賊は全滅させるぞ。」と一群しげる草を片端からなぎ立てる。「暑いな。」と言ひながら埃にまみれた顔の汗を手の甲で拭ふ。

「ガンバレ、ガンバレ。」とわき目も振らず刈り立てる兒。

「おーい、一番乘りだぞ。」と叫ぶを見れば、もう山の様に刈草を積んだリヤカーをわいわい押しながら、牧場へと急ぐ一團がある。

草を牧場へ賣却するのである。

「負けたぞ、しつかりやれ。」

と又も勵まし合ふ兒等。かうして今日も二時間足らずで刈り上げた草が約四百八十貫、この代金「四圓二十錢也」今年の夏休の招集日には何時も草を刈つた。四年以上が刈れば、三年以下の兒は運搬此の兒童等の送る慰問成績品や激勵の文を見て感激した戰線の勇士

「岩瀨重雄」氏が金十圓と次の手紙と共に學校へ寄せられた。

「此の金は僅かです。兒童の教育參考品なり。賞品代なりの一部に當てゝ下さい。」と

そこで職員會で協議研究し勇士の眞心こもるこの金を無意義に費してはならぬと苦心した

結果遂に草刈鎌を買ふ事に決つた。「草を刈つて大いに汗を流さう。そして利益は全部献金しよう。」と早速、鎌五十丁は購入され、すぐその日から草刈を始めたのだ。僅か十圓とは言へ、勇士の贈つたお金は凝つてかくも尊い仕事の原因とはなつてゐる。

因に氏は歸還され現に愛知縣幡豆郡吉田支部養蠶技術員として銃後にて奮闘して居られる。

——幡豆郡吉田尋常小學校——

一四、匿名の贈物

昨年七月突然煙の都よりとして匿名の小包が粟代小學校に屆いた。開いて見ると高級の鉛筆十打に「之れは粗末なものではあるが、私が日頃の小使を貯めた金で買集めたものです。都で出征兵士を送る毎に鄕里に於ても多くの人が戰線に立たれたことゝ思ふ。そしてそれ等の遺族がどんなに困つてゐるかゞ想像され氣の毒でならない。どうかそうした家庭の子供に、一本なりとも與へて下さい。」との一通の手紙を添へてあつた。以來其の誰であ

るかを探し求めたが、一向に知れなかつた。又本年の一月に二十五打の鉛筆が同人より送られて來た。全く名を祕しての德行に感激し、本人を探して居るが未だに判明しない。

——北設樂郡栗代尋常高等小學校——

一五、藥師如來尊堂の改築

西加茂郡石野村大字石下瀨字中切二二九番地荷物自動車業阿部鎌次氏は昭和〇〇年〇月〇〇日〇〇隊へ充員召集を受け、死を決し勇奮征途に上らるゝに際し、生來鄕黨に在り何等盡す所なきを深く遺憾とし、多年勤儉質素なる生活振により貯蓄せし、私財の一部を割いて氏神白山神社の基本金として金壹百圓を献納せられ、更に當字力石藥師如來御尊堂の改築を志し一寄進にて申出られた。區民一同深く感激し氏の志を全うすべく、氏の南支出征後協力して本堂新築を完了し、去る十三年十二月三日落成、入佛式が行はれた。氏の出征後の家庭は、妻並に子女五名にて、如何に氏が在鄕中よく勤儉貯蓄せしとは言へ、收入

全く絶ゆる事となりたるを以て、經濟的に大なる支障を來せるは誰しもよく想像し得る所である。然るに今茲に一死君恩に報いんとの大決心を以て、雄々しくも征途に上らんとせらるゝに當り、かゝる寄進を申し出さるゝは、氏の覺悟の程が察せられ、區民は言ふに及ばず全村民深く感激しないものはない。

——西加茂郡石野第一尋常高等小學校——

一六、死を祕して我が子を勵ました軍國の父

支那事變勃發間もなく、鈴木時芳さんは、應召されました。鈴木さんはお宅での一番の働き手で、後にはお弱いお父樣にお母樣、それに幼時に御病氣をなされ身體に幾分の缺陷のある弟さんの三人で、鈴木さんも後のことが氣がかりと見えて、御出發の折には知人にそれとなく御願ひして見えました。

應召されてから〇年目となりましたが、鈴木さんは元氣で御活躍との事で、私共も共に喜び合ひ、お宅の方を代る〳〵で御慰めしたり、元氣づけたりして居りました。ところが

常にあまり丈夫でない父上様が、ふとしたことで、床に就かれたきり起きられなくなりました。私共も度々御見舞ひしては、「どうぞ元氣になつて下さい。そして鈴木さんの御歸りを待つて下さい。」と、勵し慰めて居りました。御本人は苦しい中から、「有難たう御座いますが、私の病氣の事は戰地に居る息子には知らせて下さいますな。御奉公がこんな事で鈍つては濟みません。私が萬一世を去りましても、其の悲しい知らせは、して下さいますな家内の者にも能く云つては置きますが。」と涙ながらに言はれました。私共は、「感心な親子さんだ。日本の兵隊さんの強いのは、此の樣な親が付いて居るからだ。」となんとなく其のお父さんが、神々しく感ぜられて自然に頭が下りました。

病狀は日增しに惡化するばかり。或日不思議なことに病床のお父さんに、鈴木さんが會ひに來た夢を見られました。顏は、はつきりしなかつたが、聲は確かに伜の聲だつた。おれはもうあれに會つたから思ひ殘すことはない。」といつて合掌されました。すると翌日に戰地から便りがあり寫眞も同封して、父は弱いが變つたことはないか。家人は丈夫かと書いてあり、寫眞は本當にはつきり撮つては居りませんでした。それから一週間目に遂に他

界されましたが、口の利ける中は、息子には知らすなといつて居られました。其の後戰地から便りが御座いましたが、家内の丈夫な便りは戰地で元氣百倍して御奉公が出來ると言つて寄越されました。

——碧海郡安城第一尋常高等小學校——

一七、熱誠なる不斷の慰問祈願

幡豆郡一色町の德倉充治氏(五三)は資性溫厚にして愛國の熱情に富み、常に社會公共の爲に盡瘁され、昭和七年には方面助成會へ金一千圓を寄附せられ、又千間野田間の道路開設せらるゝや砂利約八百圓を寄附してその舗裝を完成せられた。

教育事業にも熱心にして、自學區の東部小學校に毎年兒童奬勵金を寄附せられ、殊に昭和七年にはピアノ一臺を寄附して、兒童の音樂教育に多大の貢獻をされて居る。

今回の事變勃發するや、國家の前途と應召軍人の勞苦を憂ふること切、何とかして奉仕の道を求めんとし、先づ以つて應召兵に餞別を送ることに決意し、一色町內應召者一人に

十圓宛の割合でその費用の寄附を町方面委員に申し出でられ、今日までに町内應召者に對して寄附された金額の多大なることは他の資産家の追從を許さない所であるが、更に今後尙幾十百人の應召者あるも事變の續く限り、繼續さるゝ決意を披瀝せられてゐるその決心の牢固たることは充分覗ひ知ることが出來る。

尙事變の進展につれて、數回にわたり數百個の慰問袋を發送して、町內出身の應召兵を慰問され慰問の手紙も公私事業繁忙の暇を見て極力多數發送されてゐる。

氏は又大字千間の氏神鹽竈神社には十日目毎に必ず參拜、出征軍人の武運長久の祈願をせられ、その折自費を以つて多くの御供物を捧げ、そのお下りは全部氏子中の出征家族に分配して、家族の慰安の資とせられてゐる。微に入り細に亘つての慰問は、全く氏の熱誠の表はれと見るべきである。

又氏の令閨えつ子夫人も夫に劣らざる銃後の活動家にして、出征軍人の送迎には自分の字の出征者たると、他字たるとの區別なく、神谷驛頭の送迎には必ず出席して壯途の激勵をせられ、又事變以來三年間、雨の日も風の日も一日の缺席もなく氏神に日參して、皇軍將兵の武運長久を祈願さる。

この一家揃つての熱誠な銃後活動に對しては、町民一人として感動せざるはなく、直接恩惠を受けた家族が、氏の許を訪れ地に額づいて感泣し感謝するもの引きもきらずといふ。

誠に銃後活動の龜鑑といふべきである。

——幡豆郡一色尋常高等小學校——

一八、篤志の牛乳

二井正勝さんは支那事變に召集を受け、母、妻、子供の三人を殘し勇躍壯途についたのである。餘り家計は豊でなく扶助を受けつゝあつたが、子供は生れて乳なく全く死に頻する狀態に陷つた。

之を見た隣人小田金一さん(四〇)は、如何にも可愛想に思ひ、幸ひ自家が牛乳屋であるので、自ら進んで、毎日三合宛の牛乳を給與し、その他何呉れとなく世話をつゞけられた。その爲め子供は目下太々と生育して、家族の喜は一通りでない。村人は小田さんのこの篤

志的行爲に對して感動して居る。

尙小田さんは近隣に先じて、昨年七月頃、日參團創立に盡力し、團員約百五十名に對して旗、欅等相當多額の私費を寄附し、毎日缺かさず熱心に之が指導に努力せられ今日に至つてゐる。殊に本年は小澤町の年行司長として銃後事業に益々力をつくされ村民を感激せしめてゐる。

——中島郡稻澤西尋常小學校——

一九、下帶五百本の献納

鷲野鶴三郎氏は當學區内では相當の成功者として知られて居る。

氏は土木受負業者である。裸一貫からとにもかくにも現在機關車數臺を持つやうになつた其の奮闘と努力は實に目覺しかつた。炎熱燒くが如き夏の日に、星から星まで川原の砂原に汗と埃を浴びながらの勞働、さては氷雨降る冬の夜凍るレールを徹宵守つた氏の長い長い經驗は、かうした激しい筋肉運動者が何を欲し何を求めて居るかを、氏に明瞭に教へて呉れた。

昭和十二年七月今次の聖戰勃發するや、北支に中支に百度を越す炎熱の下に銃執る皇軍の奮闘、零下何十度の酷寒を夜を日に次いで進軍する皇軍將士の勞苦を聞く度に、氏の頭にグント來た閃きがあつた。其處で氏は鄕黨の人々に體驗からきた此の閃きを說いて廻つた。而し其の頃の社會の人々は氏の說く所の物が餘りに奇拔に考へられた。御上品ぶつた家庭では聞くさへ嫌がつた。そんな人々は慰問袋に何を入れようかと毎日々々集つては相談した。而し其の會合はだん〳〵と邪道に入つていつた。兵隊さんの爲よりも自己の行を世間の人々に見せよう、自分はこんな立派な物を戰地に送るんだと、わざ〳〵人前で慰問袋を開けて見せびらかすやうな者さへ出來て、たれ一人氏の說を聞く者がなかつた。其の中で氏は家族の者を勵まして幾夜も幾夜も遲くまで針を運んだ。幾夜かの後やつと出來上つたのが下帶五百本であつた。雨にぬれ雪に覆はれ時には敵前にクリークを渡らねばならぬ皇軍。而も四六時敵と對峙して洗濯の間のない勇士の人々に送る氏の自己の體驗を通じた誠心の具體化である。人々は嗤つた。然し軍は感激して受取つてくれた。

其の外に氏の献納品として、キャラメル百五十箱、純毛毛布二枚を數へる事が出來る。氏の献納品は決して多いとはいへない。氏の偉大さは自己の職業體驗を通じて行はれた處に在る。

——海部郡八輪尋常小學校——

二〇、債券當選の壹千圓をすつくり献金

海部郡八開村大字鹽田の佐藤萬助氏は人も知る勤勞家である。心から土に親しみ、働いて働いて働き拔く事を自分の天命として居られる。氏は去る昭和十三年九月の或日ふと第三師團司令部を訪れて金壹千圓を差出し「ほんの少々ですが國防費に當てゝ下さい。此の度運よく債券に當選しましたが何か御國の爲に役立てやうと家内一同相談の上國防費に献納したがよからうと。實は今日持つて上つた次第です。何うか受取つて下さい。新聞等に出ては困りますから必ず發表して下さらないやうに。」と何處迄も謙遜しつゝ申し出でられた。係官を始め師團長閣下迄親しく面會致され氏の此の美舉にいたく感激せられたのであつた。

昭和十三年九月二日債券千圓に當選の發表があるや、思ひ掛けない此の幸運に夢かと喜こんだ氏は、直ちに此の大金の處置に付家内一同と相談したのであつた。氏の長男修君は時節柄國防費として献納したらと發議し、これに一家悉く大賛成をし、誰一人として一錢をも私せようとする者なく、金壹千圓をそのまゝすつくり献金する事になつたのである。現金を受取つた氏は、暫くの間の不用心を慮り、銀行へ預けられた處、父の此の舉を不審に思つた次男の護君が、「お父さんは慾が付いたぞ。」と詰問した。萬助氏は輕く頭を振つていや〳〵さうではない。此の大金を家に置いては第一用心が惡い。そして又緣あつて舞ひ込んだ此の金だ。縱令一週間でも家の物にして、先祖にも喜んでもらはう。それからお國の爲にすつくり差上げようではないか。」と答へられたのであつた。何と麗しい精神であらう。誠に此の人にして此の舉ありと云ふべきである。

一家を擧げての此の篤行は、次第に世人の知る所となり、あさましさに向ひ易い當今の人心をいたく感動せしめてゐる。

——海部郡八輪尋常小學校——

二一、二萬體の勝守と一百貫の干草

川治宗一氏(四五)は、日本ラインの片畔りに、鎮座しある日本一桃太郎さんの齋主で溫厚篤實の士である。

皇師起つて、聖戰起るや、氏は銃後奉公の信念に燃え、北中支の第一線に活躍せらるゝ將兵各位の武運健捷を祈願せる、勝守二萬體を縣會議員代表の皇軍慰問團に依託して贈呈せられた。

又氏の母堂川治かぎ(七〇)さんは、高齡にも拘はらず「私達老人も、此の非常時にじつとしてゐては、戰地で働く孫達に濟まぬ。」とて、昨年盛夏、忙中暇の折、額に汗して約一ヶ月に刈取つた。雜草を乾燥し、此の干草一百貫を馬糧として、陸軍部に献納せられた。

親子相次ぐ此の奇特なる美舉には、村民痛く、感激の讃辭を呈してゐる。

尙此の老媼は、關東大震災の際、率先義捐として金壹百圓を寄贈せし事がある。

——丹羽郡城東第三尋常小學校——

二二、銃後の先鋒

西春日井郡新川町大字土器野新田は、通稱を西町と呼んでゐる。戸數は九十戸、その九十戸は、事變以來今日迄、一日十五日の早天氏神祈願參拜、出征軍人家族慰問、戰歿者慰靈祭、慰問品發送、新聞發送寫眞通信、出征家族慰安會、日參、癈品蒐集等、枚擧に暇なき後援事業を行つてゐるが、實にこれ等の事業の裏には後備役陸軍歩兵上等兵鈴木鉢三郎氏のあることを忘れることは出來ない。氏は、何物も動かさずにはおかぬといふ强い意氣を持つて居る。氏は寫眞を業としてゐるが、常に「自分は戰場へ出る身である。それを皆さんに代つて頂いてゐるのだ。」といひ、入營兵應召兵の壯行會には、例の大聲で「天に代りて不義を擊つ」といつも軍歌の音頭をとり、もう事變以來出征家族慰安會も三回も行はれてゐる。中村公園、清洲公園のハイキング、そしてその先々で樂しい運動會。學校の校庭を借りての陸上運動會、一日の快をつくして歸られる家族の人々の姿を見て、我が事のやうに嬉しさうである。家族の寫眞、日參、ハイキング、運動會等の狀況はお手のもの、

寫眞でどし〳〵と戰地の軍人へ送附される。殆んど家業を捨てゝこれ等後援事業に顏の見えないことはない。どの位第一線の勇士達をよろこばしてゐるかわからない。特に感激を深くするものは、一日十五日の早天祈願祭である。時季によつて會合の時間は異つては居るが、氏は進んでこの誘導に當り、鈴を振つて町内を一巡して町民の參詣に便を與へ。如何なる嚴寒にも「それ鈴木さんの鈴が鳴つて來た。」と、その熱心に寒さも忘れて各戸が飛出すといふ狀態である。然かもそれ等の行を何等誇りとせず、「自分は表面に立てる樣な者ではない。緣の下の力持ちが適當だ。」と默々として銃後後援事業の實際に當つて居られるのを見るとき、益々氏の心の奥ゆかしさを偲ばせるものがある。

——西春日井郡新川尋常高等小學校——

二三、曉の鐘

中島郡稻澤町陸田の佐々木惠旭老師は、昭和十二年七月七日、支那事變勃發するや此の日を、支那事變記念日として毎月この日に、皇軍將兵の、武運長久祈願を行ふことしにて既に、一年六ヶ月間、一度も缺かさず繼續してをられるのである。

即ち此の記念日には、如何に嚴寒と雖も、老師一家は、午前四時に皆起床し、直に鐘をつかれる。村民はこの合圖の鐘聲を聞き、競つて福仙寺の本堂に集合する。午前五時に至れば、老師は恭しく佛前に出て出征軍人の武運長久國運發展祈願を嚴修せられるのである終りて、參詣人に對して、支那事變の推移、遠征將士の健闘及び其の勞苦などを詳さに解說されれば、滿座の人皆肅として傾聽する次第である。中には吾が子の奮戰の有樣を聽かされて嬉れし泣きに泣いてゐる老母もある。

時、偶々農繁期に至り、參詣人は僅に六人に減ぜし事ありしも尙續け、或は冬の日、雪深く、寒氣眞に骨を刺すの朝も尙休むことなく、風邪氣味なるもおかして繼續されしかば人皆深く感動して、如何なる事あるも、萬難を排して參詣する事を申合せて、ひきつゞき今日まで感激の祈願が行はれて來てゐるのである。

老師は更に戰歿將兵慰靈祭及び、出征軍人遺家族の慰安會などを、多額の自費を投じて

度々行ふなど、其の奉仕的、其の愛國的、救世的至誠に對しては、鄕人齊しく嘆稱して、やまざる所である。

——中島郡稻澤東尋常小學校——

二四、恩情に泣いた勇士の恩情

中島郡稻澤町の宇佐美彌一氏(五〇)は西比利亞出征の勇士である。

出征中、一面識なき人よりの慰問袋を、萬里異境の地に受けて、其の恩情にほだされて男なきに泣いた眞の勇士である。其の時の感激今尙忘れ難く、御恩を返へすはこの時と、軍用列車の通る度に、勇士の見送りに、時々は珍らしき品を持つて慰問にゆかるれば、其れを車中に受けた幾多の勇士より、硝煙のかほり高き陣中よりの禮狀がとんで來る。

其れに依つて、部隊名と氏名がわかれば、直に慰問狀や慰問袋を發送せられる事にしてをられる。近隣の出征者に贈つた慰問袋などを數へたら、實に多數に及ぶことであらう。

貧しき出征軍人の遺族には、盆正月に、下駄や着物を贈り、日參團の少年少女には、ふさ〳〵としたバナナを五、六圓も贈るなど、其の他軍事に關する寄附などには、應分以上の金額をすゝんでするなど、これ等美談は枚擧に暇ない程である。

宇佐美氏の溫情に對しては、鬼をもひしぐ我が勇士も、さぞ涙を流して、塹壕の中で泣いてゐる事であらう。

——中島郡稻澤東尋常小學校——

二五、敬神思想の涵養に努む

西加茂郡石野村大字成合前區長現方面委員、農丹羽利三郎氏(六二)は、從來自分の字が、祖先崇拜佛前禮拜のよく行はれる點は喜んで居られたが、一面敬神の念の薄かつたのを非常に遺憾に思ひ、常に之が矯正敬神思想涵養に努められた。處が遲々として進まず、意を滿すことが出來なかつた。丁度事變勃發を好機としこの時を逸してはと、斷然相寄り相計つて、毎月一回氏神樣は勿論遠く縣社猿投神社へ字中總詣りを企て時局の重大性を語り合

ひ且つ神佛の加護を謝する等、銃後國民の緊張振りを示す樣になつて來た。

時局の然らしめる所大なりと言ふも、裏面に絶えざるこの尊い努力のあつたことを忘れることは出來ない。

一方應召者に對しては激勵の辭を與へ、遺家族には面接の都度心からなる慰めと感謝の詞を述べられ、殊に病床の森七三郎氏に對しては日々の家業農耕施肥軍事補助金の使途一部貯金の奬勵に至る迄、細々と御世話され、又一般區民に對しても更に私心無く、孤獨者某の病床に伏した時は率先救護に努められる等、區民の慈父として尊敬されてゐる。

其の他方面事業に關しては、職責とは言へ實に文字通り献身的に活躍される有樣等、氏の人格に打たれる點が甚だ多い。

——西加茂郡石野第三尋常高等小學校——

二六、八十五翁の赤心

昨年十一月一日のことであつた。西加茂郡石野村大字上鷹見農鈴木喜十氏(八五)が、突然

職員室へ來られ、「今日學校の子供が大勢藁を持つて行くので何事かと聞いたら、ひるから應召者の家のスガヒを綯ふのだ。」と言つたから、私も年をとつて役にも立たないが、子供と一緒にせめて自分で出來る銃後の務スガヒなひの仲間に入れてもらひたいと言はれた。意外な言葉に職員一同も感じ入り、ではお願ひ致しませうと、早速依頼した。運動場の各所に各家々の分に組分けして、翁も兒童も職員も一齊に作業にかゝつた。默々として手を動かして居られる翁の姿こそ、實に尊く自然と頭の下るのを感じた。一時間餘にして、合計七千本餘りの仕事をした。其のあとでこれは自分の作つた草履だが、聯區內應召者の家へ一足づゝあげてもらひたいと言つて持つて來られ、聖恩の尊さ、皇軍將士の御勞苦等色々話して歸られた。

この翁あつてこそ、日本は强いのだ伸るのだとつく〳〵感激した。

——西加茂郡石野第三尋常高等小學校——

二七、貴き奉仕的事業

樋田幸治郎氏(四四)の奉仕的事業は、今初つたことでは無い。又單に學校に對して寄附をされた事のみでも無い。町のこと、字のことに對しても、常に陰の後援者として、町民の感謝の的となつてゐる人だ。

今回の事變以來、殊に銃後の地方的美談として、後世に殘す事柄が多い。由來、祖父江町は一町内に小學校が六校もあり、町の財政上、行政上なか〳〵教育問題も至難な點が多いのである。校長初め職員が、獻身的努力をつゞけて來ても、教育上の設備の如きは、意の如くならない狀態だ。氏の聯區校たる祖父江第三小學校の校長は、昨年四月新任校長として全く未知の學校へ赴任した人だ。着任早々教育の刷新に力め、事ある毎に校下の有力者に對し自己の教育方針を語り、意見の交換をはかつた。然し、時局は益々多難にして、物價は高く、折角の改善案もたゞ施す術なく、精神訓育に教育の中心をとり、設備は漸次整頓する樣つとめて來た。然るに此の由を耳にして樋田氏は一日校長と面談して十分に當

時の學校の設備狀況を聽き其の日はそれですんだ。然るに其の翌日から、着々學校に對して寄附行爲が開始さるゝに至つた。先づ約一段五畝歩の田畑を、一部は買ひ、一部は借り受け青年團員の勤勞奉仕と相待つて、十年餘も難問題たりし運動場擴張も立派に出來上つた。それが僅か二ヶ月の短時日である。其の後校舍の修繕を初め井戸及手洗場の新設裁縫室の疊換等實に校長の言ふまゝに、或は人足を送り、或は出資して實に學校も一新するに至つた。遂に聯區の人々も校長に對し、もうこの邊で、樋田さんからの芳志は打切つたらどうだと、忠言を申し入れる迄に至つた。校長も已に其の儀は自覺し居ることゝして、其の旨樋田氏に言ひし處、樋田氏は別に自分は名を賣る爲でもなく、物質上の希望は持たぬ我が子孫のために、公共的の事業を殘しておいてやり度い。決して私の名を出して下さるな特に此の超非常時局に對し、私の仕事が皆樋から、それ程喜んでいたゞけば、心より滿足だとの事、校長も感極つて歸校せし次第である。さて其の寄附の仕方を一、二紹介してみよう。

去る七月末のこと、或日學校の玄關へ立派な大便所用の陶器が十二箇運び込まれた。き

けば樋田氏方よりとのことと故、授業後職員一同一心になつて、大便所内に取附けんとせしが道具類が思ふ樣になく遂に中止して終つた。幸、翌日は日曜日故、校長は近所の職人に賴んで、取附けんものと、早朝出校せしに誰か大便所内にこつ〳〵と小言を言ひつゝ仕事をしてゐる者がある。校長は、ひそかに、部下職員の中、誰かゞ自宅から道具を持參して昨日のつゞきの仕事を、してくれる、誠に感心な先生だと考へつゝ來て見ると、それは專門の職人だ。職人は校長にこんな風に緣板をきつて困つたものだ。私達は、態々樋田さんから依賴され、しつかりと取附けて終ふものを、仕事が倍もかゝつて困つてゐる所だ。とのこと校長は昨日自分達のした事を、有りのまゝに話をして、談笑の中に職人に詫びた次第である。そこで全部タイル張になつて終つた。

又一日校長は訓話の中に革の大切なことを話せしに、松坂屋からフットボール三個が送りとゞけられた。後からきけば、學校でボールがなくて困つてみえるさうだから注文して置いた譯だとの事である。

凡て今回の寄附行爲は非常時局につき一般町民の負擔を輕くし、自己獨りが其の犧牲となつて銃後の御奉公をさるゝ精神の現れである。去る年末に際し、自ら松坂屋から全町の出征者に對し慰問袋を發送され、遺家族に對しても夫々各家庭へ慰問品を届けて謝意を述べられた。感激した出征者は樋田氏方へ感謝狀を山の樣に送つて來て居る。

——中島郡祖父江第三尋常小學校——

二八、献身的慰問

知多郡内海町内田彌内氏(五六)は子息敏夫氏と協力して町出身勇士へ慰問勇士の留守宅訪問等事變發生以來足掛三年に亘つて酷暑嚴寒の中を熱誠溢るゝ銃後の奉仕に町民感謝の的となつてゐる。

彌助氏は日露戰役に從軍し右腕貫通銃創を受けた戰線馳驅の勇者、子息敏夫氏も步兵上等兵の軍籍に在る身、勇士への心遣りも亦一しほで父子揃つて知多銀行へ勤務、多忙のかたはらよく寸暇をさいて銃後慰問に活躍し、彌助氏は晝間は勇士家庭を巡回訪問をなし夜

は慰問通信の蒐錄に、寧日なく嚴寒の昨今にも其の執筆は深更に及ぶといふ。敏夫氏は趣味の寫眞技術を銃後の奉仕に役立てゝ昨春來休日毎に勇士家族の寫眞撮影、町内ニュース撮影等父子協力の敬虔な態度は全く感謝の外はない。

其の慰問事業の概要を摘記すれば

一、昨年四月勇士各家族の寫眞を撮り、其の後應召入隊兵あらば、直ちに其家庭を訪問撮影し之を勇士及其家族に贈呈し、更に本年に入り第二回目の撮影實施中である。

一、毎月勇士への通信用として町内ニュース農事狀況等を撮影、此又全勇士及其家族に贈呈郵送して居る。

一、毎月一回紙數三十數枚、字數三萬數千に及ぶ鄕土通信及從軍將兵よりの消息文を蒐錄したる冊子を自製の上、前記寫眞を添へて郵送慰問して居る。

一、前記鄕土通信、各將兵の消息の印刷物を各家族へも配布し、且絶えず其家庭を巡回訪問して其生活狀態を窺ひ、町役場と緊密なる連絡を採りつゝ其援護事業の手助けをなし、且遺家族の相談に應じて善處する。

右の樣な事業が既に三年越に續けられてゐるので、遺家族の信望頗る厚く家庭的の相談對手としてなくてならぬ人となつてゐる。戰線の勇士からも此の熱誠なる慰問に對して心から慈父の如く慕はれて、彼等の通信も其家庭へよりも先づ同氏へと、頻繁な通信が毎月百通をも超える有樣である。

殊に此等眞劍な精神的努力に加へて此大事業遂行には莫大なる費用（仄聞するところ既に數百圓を突破してゐる）を支出され、且同氏は宿痾の動脈瘤の爲め絶對安靜を要する容態なるにも不拘「此は畢生の聖業なりとし斃るゝまで止まず」との悲壯な覺悟をせられ、眞に獻身的の活動を續けてゐられるのは、全く前線將兵の忠勇にも比すべき涙ぐましき迄の努力で、只感激の外はない。

——知多郡内海第一尋常高等小學校——

二九、鑑となつた鏡

七寶尋常高等小學校の玄關を上ると、右側に一個の大きな鏡が掲げてある。是は本村出

征軍人牛田幸一氏の寄附せられたものである。

時は昭和十三年寒さ嚴しい或る日のこと、服部校長は職員會の席にて、本年八月我が七寶村川部から福井歩兵第卅六聯隊輜重兵に應召せられた牛田幸一氏より次の様な手紙と金拾圓が寄附せられた。

拜啓時下寒さ嚴しく凌ぎ惡しく御座候折柄職員諸先生始め兒童一同御勇健にて御暮のこと丶存じ候、職員諸先生並に兒童の銃後のお働きは深く〳〵感激致し厚く御禮申上げ候留守中は子供色々と御世話下され、且又私の所へ目新しき新聞を御送り下され、何とも申譯なくたゞ感謝に堪へ無い次第に御座候。上海北支に大勝を得しも皆銃後の職員諸先生の御力と存じ居り候。良き日本國民の出來るのも全く職員諸先生の養育の致す處と存じ候、現在より貳拾餘年前先生に教を受けし當時を思ひ、身に泌みて諸先生の御恩を感じ、職員諸先生に感謝致し居り候。冀はくば益々良き日本國民に兒童を養育せられんことを祈り申候。

此に私の心情を書き、寸志に候へ共教育材料の萬分の一にもと思ひ御送り申上候。

同氏は貧しき家庭に生れ農業のかたはら庭師をなし、暇があれば讀書に餘念がなかつたが、最近志を立てゝ佛道に入り、一年有餘にて今回の動員下令に應召せられ、北支派遣軍に加はつて出征せらる。氏は至つて筆まめにて軍務多忙な戰地より小學校を初め、當村役場在鄕軍人會其他各種團體へ月に幾回となく通信せられ、一般の人々の感心の的となつて居る。

家には老父母を始め妻妹と、尋二兒童を頭として三人の兒童で、生活も豊でなく、軍事扶助を受けらる。幸一氏は軍務に精勵恪勤、戴く僅ばかりの俸給をも蓄積し、或は家庭に送りて生活を助け、尙進んで小學校教育材料として寄附せられたことについては村民一同感激しないものはない。

服部校長は此の金にてなにか意義ある物を購入し永久に保存致し度しとて、相談の上兒童の鑑となる様に、鏡を購入し小學校の玄關を上つた右側に掲げ、朝夕兒童職員の心の鑑とするに至つた。

本年十二月再び「最も僅少なる金なれども、拙者の意のしるしまでに御送りする。笑つ

てお受けを願ふ、教育の爲に使用を」なる手紙を添へ、金五圓寄附せらる。

其の意味に副ふべく時計を買ひ裁縫室に掲げらる。此の時計の音まで、貯金貯金とひびき常に我々に、貯金せよ〳〵と聞える。

牛田幸一氏の如きは實に感心な人である。

——海部郡七寶尋常高等小學校——

三〇、彩管に心血を注ぐ銃後の畫家

銃後も同じ國の楯！　此の精神に燃え立ち、都に鄙に老も若きも擧つて一體となり、聖戰貫徹興亞の道に協力邁進の譜は益々高調に響きつゝある時、此處に掲ぐる一美談こそは戰時下に生きる眞に尊い神國日本の國民の姿であらう。事變勃發以來大陸の地に、幾多の輝やかしい戰果を收めた我が鄕土部隊が、世界戰史上にも未だ曾て見ざる壯烈なる上海敵前上陸の敢行は、何時までも吾人の胸に銘記されるものである。この成功の陰に祕められた幾多勇士の盡忠美談中、「涙の君が代」をもつて世の人々を感激せしめた西成村西大海道

出身谷正宗上等兵の尊くも美しい最期の姿は、大和武士の龜鑑としていち早く映畫化され各地に上映せられ、益々感激を新にした一宮市天道町杉山元輝氏もその感激に涙を催した一人であつた。氏は此の勇士の姿に感激するや、これを繪畫として永久に殘すべく再現するこそ彩管報國の道であると信じ、直ちに遺族を訪問し具さに最期の狀況を聽取すると共に所屬部隊にも參考資料の貸與を願ひ、又一方谷上等兵最期に君が代を唱へつゝ瞑目せる上海篠崎病院に詳細なる事情の回答を請ひ、東奔西走漸く資料を手にすることが出來た。

かくして得た資料を如何にして油繪として表現するか、これについても苦心を重ねること二月餘り漸くにして崇高なる谷上等兵の君が代を唱へつゝ瞑目せる病院内の情景の構想が出來た、出來上るや氏は休息する暇もなく唯一心彩管に魂を打ちこんで描き續けた。

然れども筆は意のまゝならず。己の意に滿たぬ所もあれば氏はしばし筆を休めて傍に君が代のレコードをかけ坐を正しく畫面を靜視し、崇高なる雰圍氣の中で修正の個所を發見しては筆をすゝめ、精魂を傾けること四ヶ月餘り、遂に尊き畫面を完成した。氏は直ちに遺族の來訪を求め、畫面についての忌憚なき意見をきいた然して更に修正すること旬日餘

世にも尊く美しき繪はかくして完成され、その書面は鄕里西成尋常高等小學校に寄贈された。此の杉山氏の美擧に衷心より感謝した小學校は、長く生徒訓育上の聖書として活用することゝ成つた。

更に氏は續いて、同じく所屬部隊內事變記念館に、遺族に、陸軍省に、それ〴〵精進の書面を寄贈した。此の寢食を忘れて彩管報國に生きる杉山氏こそ、時局下日本の書家として最も立派な人であると思ふ。

——丹羽郡西成尋常高等小學校——

三一、使丁の隣人愛

本校使丁として六年間、實直な勤務を續けた海部郡七寶村鯰橋寺西重太郎さん夫妻を、銃後美談の主人公として物語を進めて行き度い。

教職に就いて七人の使丁に接したと言ふ服部現校長が常に、「稀に見る使丁である」との讃辭を惜しまない點や、とかく使丁の口から洩れ勝な學校風評も、この村には一度も立つたことの無い點、この二つを思ひ合せてもこの夫妻の善良さを物語るに充分なものがあると言つてよい。話はこの重太郎さんの西隣に住む後藤富三郎さん老夫婦の養子宮太郎君が滿期除隊數ヶ月ならずして應召することになり、痛くこの老親に心を殘して出征したことから始まる。八十の寄る年波に日々の厨の業も覺束なげな老人の生活が重太郎さん夫妻の純朴な胸を打たしめずにはおかなくて、宮太郎君出征後は何くれとなく、近親も及ばぬ心を配つて居るのだつた。さうして居る中に、富三郎さんは只さへ身寄少い上へ、老妻ともさんの病死に遭遇した爲か、程なく病床に就くと云ふ有樣だつた。重太郎さん夫妻の隣人愛はいよ〴〵高められ、毎日十四五町もある學校からの道程を、雨の日も、風の日も、校務の隙を見ては自轉車で馳付け、看護に務め、三度の食事は言ふまでも無く、病中の世話から不淨の始末に至るまで、他人乍ら全く眞の親子にも等しい懇切の限りを盡したものだつた。病人の口に合ふ樣にと、自分の家で調理した眞心の食膳を運ぶ二人の姿が、富三郎さんの胸には此の世乍らの神佛とも影じたのも至極なことで、物のあやさへも見さはめられない衰へ切つた中から、常に合掌するのだつた。「宮太郎君の凱旋までは、是が非でも存

命させ度いもの」と八方手を盡くした二人の努力も遂に空しくて、昭和十三年も押詰つた暮の二十一日、富三郎さんは靜かに他界したのではあつたが、その相貌には、如何にも滿ち足りた様が伺はれたとか―、二人の篤行に感激して語る村人の言葉であつた。葬儀萬端も二人の手でなされたことは、勿論言を俟たない事實である。かつて富三郎さんの存命中に宮太郎君が戰友の遺骨をたづさへ、戰地から原隊へ歸還を命ぜられ、一日賜暇を得て病父を訪れたことがあつたが、重太郎さん夫妻のこの隣人愛に大いに心打たれ、感激を新にし再び勇躍して戰地に馳向つたとか傳へられてゐる。尙、事變を迎へてから村内各種團體の銃後後援事業が、學校を會場として、度重ねて、行はれつゝあるが、その都度、二人の滅私的奉公振りに、主催者幹部が等しく賞讃している事等、精神的奉公に燃えた使丁の模範として、美談集の一頁に加へられたいものがある。

――海部郡七寶尋常高等小學校――

三二、熱誠あふるゝ遺家族の慰問

日支の風雲急を告げ、次から次へ動員下令を見るに至つた。西加茂郡高橋村古鼠に生れ現在は名古屋市へ出て材木商を營んでゐる清水令次氏も應召することゝなり、多數鄕黨の人々に送られ、萬歲盛裡、勇躍征途に上つたが、不幸即日歸鄕を命ぜられ、再三の歎願もその甲斐なく悄然として家に歸りやるせなき數日を送つた。

奉公の念に燃ゆる氏は、このまゝではどうしても過されなかつた。應召者遺家族の慰問により、奉公の誠を致さんものと決心し、親戚知友より受けたる餞別を加へ、金百圓を高橋村應召軍人後援會に寄附された。

氏の熱誠はこれのみでは止むべくもない。其後、應召遺家族慰問としてネル一反づゝ、現役入營者へ旗一本づゝ、應召者子弟へ教科書代及び學用品等、見積價格四百圓の寄附をされてゐる。此の度重なる慰問に、應召者遺家族はもとより、村民一同氏の奇特なる行爲に對し感激せざるものはない。

――西加茂郡高橋第一尋常高等小學校――

三三、公務の名譽

知多郡河和町立南部青年學校指導員、豫備上等看護兵、齋藤藤基氏(三九)は河和町大字豊丘の人である。現在青年學校の生徒からは我等の兄として親まれ、師と敬はれてゐる氏は溫良の中に威嚴のある人格者である。昭和十三年九月青年學校指導員として就任せられた其の當時家庭では長く病床にありし祖母の死後であり母上は病氣勝ちで餘り强健ではない父上と藤基氏とに依つて農業が營まれ田畑の仕事は何時も捗らず後れてゐた。此の時區長より指導員缺員の爲に就任されたしと依賴されるや、氏は「それは名譽のことです。自分も軍籍にある以上、何時でも奉公の誠を捧げんと來るべき日を待つて居ました。此の時銃後の青年教育に盡させて頂けるのは幸であります。及ばず乍ら、しつかり務めさして戴きます。」と言ひ、父の許しを得て快く引受けられて、人手不足の家業に勵むと共に熱心に青年學校の教練に當られて居る。昨年暮は母上及祖母の長き病氣のため、出費も多かつたが此の時、指導員手當として渡された金拾六圓拾七錢を「自分は奉仕のために指導員を勤めて居るのである此の金を私するのは相濟まない。」とて、全部軍當局に献金されて居る。家にあつては、父母を助け、弟を勞はり、出でてはよく青年學校、在郷軍人等の公務に係り而も清廉である。此の氏の意氣に感激したる村民一同は銃後のつとめに精進し、生徒は其の人格を慕つて居る。

——知多郡河和第三尋常高等小學校——

三四、少年團の指導

幡豆郡西尾町の松本豊氏は、松本印刷所の主人であつて敬神の念厚く、業務の傍和泉少年團を指導しその成績極めて優良である。

少年團を結成されたのは昭和九年であつて、以後今日に至つてゐるが、至誠以て其の指導にあたられ、其の間既に西尾町長、幡豆郡神職會、和泉町等より表彰をされてゐる。その概要は次の通りである。

一、毎朝少年團員と共に拂曉鄕社伊文神社に參集して神社參拜をなし、事變後は出征將士

の武運長久を祈願せらるゝなど、一日として缺かされたことがない。

二、祈願參拜後一時間乃至二時間に亘つて團員と共に奉仕作業として專心神社境內の清掃をせらる。率先箒を持つて團員を督勵せられる姿全く敬服の外はない。町民の參拜する者出征將士の家族並に遺家族の參拜する者、常にこの奇篤な氏の行爲に感謝し乍ら、清く神々しく參拜をして居る。

三、團員には銃後の子供として節約の必要なることを常に敎へられ、毎日一錢の貯金を奬勵せらる。これを三十錢貯金といふ名のもとに勵行してをられるが、尙奇篤なことに月々各團員一名に對し五錢宛私財を賞として與へられ、それを加へて貯金するやう督勵してをられる。

四、松本氏昭和〇〇年九月應召勇躍出征されるや、少年團員は益々氏の平素に於ける訓誡を守り、毎月早朝社頭に集合し、祈願をこめると共に淸掃の奉仕作業に從事した。如何に氏の敎化が幼い子供にまで徹底してゐるかを伺ふことが出來て感激の外はない。昭和〇〇年七月除隊現在は孜々として家業に又奉仕作業に從事してをられる。

昭和九年和泉少年團結成以來學校並に保護者と緊密な聯絡のもとに努力され現在も立派な成果を上げてをるのは、一に松本氏その人の率先躬行、報恩感謝の信仰心によるものである。

非常時に直面し益々銃後國民に滅私奉公の必要なる秋、松本氏の如きは實に世の模範とすべきである。

——幡豆郡西尾尋常高等小學校——

三五、週刊加茂時報の慰問

吉田順治氏は擧母町の殷賑街中町に、吉田屋といふ吳服商を營んで居られるが、今次事變の勃發するや、齡すでに五十を越えながら子供のなきため、第一線の御奉公の出來ぬのを甚だ遺憾とし、町內は勿論、舊根川村より出征者のある度毎に餞別を贈り、又負傷者あれば見舞ひ、戰死者あれば香華を贈るなど、我が事の樣に心を盡くし、殊に家鄕を後にして征途に上られたる勇士には、せめてもの心慰みにと、鄕土記事を滿載せる週刊加茂時報

を、毎週百數十通づゝ戰地に送つて、今日に至るまでかつて休まれた事がない。

戰地にあるものはまた此の奇特なる行爲によつて、常に家郷の狀況を知る事が出來、此の上もなき樂しみとして待ち詫びる樣で、感激をこめた感謝の手紙も、本當に積んで山をなすといふ有樣である。

——西加茂郡擧母第一尋常小學校——

三六、老人忠九さん

忠九さんの家には、たつた一人のお孫さんと、歩くことの出來ないおばあさんと、三人暮らしである。

其のお孫さんが出征したので、忠九さんの家は大困りである。然し忠九さんは、氣性の强い人であるから、決して困つたなどと云ふ事は口にしたことがない。

今度村で山野を開墾することになつた、忠九さんは老人のことである故、開墾が出來ないから、分け前の段別はお返へしいたしたいと申し出た。

村の人は、「開墾が出來ねば、みんなで手傳つてあげる。お孫さんが歸つて來て、お嫁さんをもらふやうになれば、今わけ分の畑はもらつておいた方がよい。」と勸めたので、其の畑をもらふ事にした。

然し忠九さんは、人に手傳つてもらふ事が嫌ひであるから、若い人と同じ樣に毎日寒い野原にヨボ〳〵としてツルを振ひつゝ一緒に働いてゐる。

みんなが手傳はうとすると、「よしておくれ、よしておくれ。人によりやつてもらつておこしたと言はれては一生の恥になる。出來るだけやる倒れるまでやる倒れて死んだら後をたのむ。」と言つて、決して手傳をさせない。

畑の草取でも耕作でも決して困つたなどと言はずに、又人の助けを決して受けずに、毎日〳〵どんな日でもせつせと働いてゐる。

——渥美郡赤羽根尋常高等小學校——

三七、模範部落の指導者

西加茂郡石野村大字石下瀬字井上太物雜貨商、現力石區長澤田元三郎氏は、前區長伊藤佐助氏の後任として昨秋就職以來專心職に奉じ、殊に銃後の奉公心に富み、一般區民の等しく敬服する所であり、其の美談は枚擧に遑あらず。

銃後の護を全うするは一に國民精神を發揚するにあるとの見地より、大いに敬神思想を啓發培養せんものと、神社參拜に際しての作法及び祈詞を指導し、四大節其の他記念日及び各實行週間に於て當區民全員を氏神境内に集め、自ら其の指導者となりて行事を爲し、大いに敬神思想の啓培に努む。

尙老若男女の集ひを機に、其の現狀を自ら撮影し、慰問袋に入れて鄕黨出身の出征者に贈り慰安をなし、尙事變に對處する國民の覺悟として各種の美談や標語をプリントして發表し區民の現時非常時局に要する認識の向上に力めてゐる。

斯の樣な指導者を得た當字力石は、爾來上下よく一致協力公に盡くし、各々其の業に精勵して益々銃後を固くし、實に本村の模範部落である。

——西加茂郡石野第一尋常高等小學校——

三八、數々の獻納

丹羽郡丹陽村大字外崎の佐々伊三郎氏(六七)は、嘗ては日淸、日露の海軍勇士であつた。事變以來數々の恤兵献金献納をして村人を感激せしめてゐる。事變始まると間もなく好きな煙草の喫煙數を減じて節約した金子七圓二十錢、村の家々を廻り集めた襤褸を賣つた四十圓、夜就寢前に造つた草履五百足の賣上二十圓、丹精込めて作つた梅干三貫五百匁、炎暑の候に農事の暇に刈り集めた干草三百八十瓩、千五百瓩と二回に亘りて、路傍に棄てゝあつた銀紙を拾ひ集めたもの二貫五百三十匁等を國防献納をしてゐる。實に優れた銃後の熱情家である。

——丹羽郡丹陽尋常高等小學校——

三九、物資愛護箱

艶金奥町工場主は木の空箱を利用して小型の箱四十個を作り、物資愛護箱と命名し各町内要所に配置し、各所の兒童により鐵屑蒐集に努めしめ、其の金額三十圓以上に達し、中には一部は國防献金に、一部は日參團の費用に充てられたものもある。此の鐵屑蒐集は今後永く繼續されることになつてゐる。

——中島郡奥尋常高等小學校——

成人婦人之部

四〇、知事から表彰された銃後の母

碧海郡刈谷町小山の加藤まささんは昭和十一年十月夫惣治郎さんの亡き後を引き受けて

當時二十四歳の次男鉈衞君を豊田工場に働かせ、三男徳川君以下三人の子女と共に農事を勵み、「惣さんの家は、よく御精が出る。」と、近所隣からは專ら感心されてゐた。

そこへ、夫歿後まだ一年もたゝぬうちに、日支事變は勃發し、まささんの家にも令狀は届けられ、兄鉈衞君と弟徳川君とは一緒に應召することになつた。しかも翌朝になつて、更に、大府町の山本家に養子に行つてゐる長男常磐君も應召したといふ知らせが、はいつた三人の我子が同時に應召した母のまささんは、「この聖戰に三子を第一線に送るのは、家門最大の名譽である。軍人であつた父も、さぞ草葉の蔭で喜んでをられるであらう。留守中のことは、少しも心配は要らぬ。どうか兄弟互に武勳を競つて、あつぱれ帝國軍人の鑑となつて御奉公せよ。」と、慈愛のこもつた激勵を與へ、その行を壯にした。

三人の愛子を戰線に送つたまささんの家は、後には男とては高等二年の輝男君だけであつた。まささんは、こんな小さな子供と共に愈々はりきつて働き出した。女手で、一町餘の耕作はとても切り廻して行けまいと、勞力奉仕を申し込む人があつても、困つた時にはぜひ御願ひいたします。出來るだけ致しますから。」となか〳〵うけいれず、にこ〳〵とし

て働き、夜になれば疲れもいとはず、氏神様に三子の武運を祈るのであつた。

かくて、まささんは、女手一つでありながら、冗費を節したと云つて、國防費に三十圓恤兵費に二十圓を献金した。町民はまささんの心掛けに感激した。

かくて忙しい秋が來た。學校の先生は再三手傳ひを申し出て、ある日輝男君の同級生を連れて稲刈の手傳ひをした。ところが、歸りに、まささんは、鉛筆を贈つた。先生も生徒もかへつて恐縮した。

ある日の新聞に、石井部隊戰傷者の氏名が發表された。その中に鉈衞君の名があつた。これを見た隣人は驚いて慰問した。まささんは、「ありがたうございます。私は兄弟三人揃つて戰死したといふ電報が一度に來ましても、びくともしません。覺悟の上です。鉈衞はどこを負傷したか知りませんが今から御宮へ詣つて、早く傷をなほして戰死するまで働くやうにと祈つて參ります。」と、その厚意を感謝した。まささんは愛兒が負傷してもびくともせず、ひたすら我が子の再起を祈願し、航空郵便を利用して、榮養品藥品等を送るなど慈愛の心を盡くされたが、不幸、間もなく原隊から死亡の公報があつた。

鉈衞君の町葬は、翌春小高原校で執行せられた、終了後、まささんは、在鄕軍人會、消防會、男女青年團、從軍會、國防婦人會に、各々金一封を贈つて、謝意を表するところがあつた。

そして、まささんは、愈々奉公の念を固め、農事にいそしんだ。ところが又々悲報がまささんの所に屆いた。それは長男常磐君が、戰傷、內地病院に送られた、といふのであつた。しかし、幸にも、常磐君は、間もなく快癒して歸鄕せられた。

まささんの積る篤行は、遂にその筋に聞え十三年十月十一日縣知事から次の表彰狀が授與され又鉈衞君の武勳に對しては、功七級の金鵄勳章が授與され、重ね重ねの榮譽を得られた。

表彰狀

碧海郡刈谷町　加藤まさ

資性溫和ニシテ勤勉夫ニ仕ヘテ貞淑ナリ夫歿後四男四女ヲ擁シテ家政ヲ執リ更ニ倦ム所ナシ偶々支那事變勃發シテ三子同時ニ應召スルヤ日夜粉骨碎身家

業ニ精勵シ冗費ヲ節シ率先献金ニ努メ二子ノ戰傷死ニ遇フモ敢テ愕カス銃後援護事業ニ專念ス斯ノ如キハ稀ニ見ル殊勝ノ行爲ニシテ洵ニ他ノ範トナスニ足ル仍テ羽二重一反ヲ贈呈シ之ヲ表彰ス

昭和十三年十月十一日

愛知縣知事　從四位勳三等　田中廣太郎

——碧海郡小高原尋常高等小學校——

四一、纖手に握るハンドル

夫を第一線に送つたか弱い女性が、留守をしつかと守つて、雄々しくも、銃後の生活戰線に活躍してゐる軍國の秋に聽くもゆかしい爽話——渥美郡赤羽根村若見布藤九一、みつさんの夫妻は、愛兒てるさんをいつくしみ育てつゝ貸自動車業を營み、九一氏自身運轉して多忙な中にも樂しい月日を送つてゐたが、夫九一氏は、名譽の應召をしたので今までの

商賣を廢業せねばならぬことになつた。

妻のみつさんは、この時局に、夫の留守に商賣を止めるやうなことになつては、戰地に在る夫に申譯がない。さりとて、女子供の中に、氣心も知れぬ運轉手を雇入れるのは、不安だといふので、とうとう健氣にも、自分でハンドルを握る決意を固め、石にかじりついてもと、愛女てる子さんを豊橋の親戚に預け、名古屋車體檢査所で開催された自動車操從の講習生となり、大の男と混じつて血の出るやうな猛練習を續け、僅か十日間の短い期間ではあつたが、みつさんの腕はメキ〳〵上達して、見事に試驗にパスして免許狀は下附され、みつさん必死の努力は立派に報いられた。

みつさんは、喜び勇んで歸鄉し、今は銃後の第一線に立つて、夫にまけずに、ハンドルを握つて雄々しく奮鬪を續けてをり、いたく村民達を感動させてゐる。

——渥美郡若戸尋常高等小學校——

四二、自轉車で行商に出る銃後の妻

昭和〇〇年八月名譽ある召集令狀が、名古屋市昭和區廣路町清須山三三葉山吉藏さんの家にも屆けられた。受取つた妻女しげのさんは早速主人の行商先へ電報を打つた。

歸宅した吉藏さんは妻女に

「お前がどんなに內職した所で、到底親子四人暮しては行けない。一そ、里へ歸つたらどうだ。」

と話した。然し、しげのさんは、

「一旦あなたに嫁いだ以上、どんなことがあつても人の厄介になりません。小さい時に覺へた自轉車で、あなたの行商を引續いでやります。きつとやつて見せます。安心して御國の爲に一生懸命に働いて下さい。」

と、固い〳〵決心を披瀝し、主人を安心させ戰場に送つたのである。

翌日からしげのさんは特に早く起き、色々と準備をし、長男敏雄を學校に出し、殘る二

兒を里から賴んだ祖母さんにゆだねて、相當かさばる海產物食料品を、自轉車にのせて市中は勿論市外近在までも得意廻りをされる。歸りは大抵夜の八時頃。それより子供をつれて氏神樣へ皇軍の武運長久を御祈りに行かれる。此の狀態を知つた方面委員の方は、軍事扶助を受けるやうにと奬められた。

然し、しげのさんは、

「御同情誠に有難うございますが、戰地に居る夫の肩身も狹くなることでせうし、學校に行く子供に依賴心を起させては。」

と辭退された。

可弱い體に鞭打つてどんな日も、一日として缺かさず行商を續けて居られる。

眞に銃後を守る日本婦人として模範とすべき御方だと思ふ。

——名古屋市廣路尋常小學校——

四三、朝夕の水垢離

今次事變勃發するや永谷清市氏は勇躍應召特務兵として北支戰線に轉戰中であるが、其の出征に際し、妻のとみさんは、ひそかに左の人差指を切つて血染の日の丸を作り、之を送つて壯途を勵し、夫よりは生還を期せずとの覺悟を示した片身の短刀を受取り其、の後は短刀を懷中に深夜又は未明を選んで氏神に日參し、朝と夜は井戸端で水垢離をとつて皇軍の戰捷と夫の武運長久を祈つてゐた。此の聖なる祈りは、始め家人すらも知らなかつた程である。夫出征後は老いたる兩親を扶け、四男一女を育くみ、夫に代つて一家の中心となり、家業の農業にいそしみ、只管戰線にある夫をして後顧の憂なからしめたるのみならず、屢々戰地に激勵の手紙を送つて夫の勳功を祈念し、特に愛兒の健康と發育には細心の關心をはらひ、絶えず學級擔任教師と連絡をとつて遺憾なきを期する等、全く軍國の母として將又よき母としてとみさんの健氣さは、村民一同稱讃の的となつてゐる。

すでに右の美談は大阪朝日、新愛知兩新聞にも掲載され汎く世人の龜鑑として稱揚されてゐる。

四四、銃後の妻の奮闘

——幡豆郡福地尋常高等小學校——

西加茂郡石野村大字富田神谷まささんの夫神谷喜代治さんが支那事變當初、出征せられるに當つて喜代治氏は自分が應召後の家族の生活子供の養育について非常な心配をされ、「只今まで自分が家にあつて働いた間でも、つましく生活して來たのにも拘らず、貯金としてはする事が出來なかつた。自分が出征したら隨分苦しいだらうが、子供の養育だけはよろしく賴む。之だけが心配でならない。」と。

出征に際し再び生きて歸らぬとの覺悟があればこその悲壯な言葉であつた。之を聞かれた妻女まささんは、此の言葉にいたく感激され「どうぞ後の事は御心配なく。御蔭樣で私は丈夫な體を持つてゐますから、働けるだけ働きます。そして子供達には決して不自由はさせません。昭子ももう四年生ですから御手傳ひの出來るだけ手傳はせます。その代り學

校へ行くのに學用品が買へなかつたり、人前に出てはづかしい樣な服裝はさせません。此の事は、もう貴方に召集令が參りました時に私の此の胸にしつかりと決めた事です。どうぞ子供の事は御心配なく、思ふ存分御國の爲に働いて下さい。」

此の夫に此の妻。之を聞いた近所の見送りの人々誰一人袖に涙せぬ者とてはなかつた。

喜代治氏は、當字富田の企業家近藤貫一氏の工場に石工として働き、近來頗る謹直に働かれるので、主人近藤氏も非常な信頼を以て之を遇して居られた。

然し氏の家庭は、三人の子供を持つ五人の家内で働く身は己一人のため、苦しいと言ふ程の生活ではないが、決して裕福ではなかつた。隨つて自分が出征するに當つて後に殘つた家族の生活が心配になつたのである。

喜代治氏夫人まささんは、夫の此の心持をよく察し、夫に後顧の憂を殘させぬため自分の働きによつて一家をさゝへるべく覺悟されたのだつた。

喜代治氏出征の明くる日からは全く一變して、まささんは字一番の働き手となられた。女の身で他家の田打をしたり田植や田の草取り等日傭取となつて、朝は子女昭子さんを學

校に送り出すと共に働きに出られ、幸ひ長女昭子さんがもう四年生なので學校から歸宅すれば家事の手傳ひの出來る所から、晩は遲くまで文字通り眞黑になつて働かれ養蠶の期節ともなれば桑摘やら他家の養蠶手傳ひやらで日當を得て、子供にも他の子に劣らぬ服裝も調へ立派に銃後の家庭を守つて居られる。その生活振は主人喜代治氏の在郷中と殆ど變らない位である。乳呑子を抱へての此のまささんの働き振りに感ぜぬ者はない。

喜代治氏も出征後家族の生活を心配され、月々渡る俸給を出來得る限り節約し、家庭への生活費の一部として送金されてゐるのである。

此のお金を手にされたまささんはけなげにも、「此のお金を使つてはならぬ。之はお父さんがあの不自由な戰地で食べたいものも食べず、飲みたいものも辛棒して、貯めて送つて下さつた尊いお金だよ。お前達もその積りで無駄なものは決して買つてはなりませんよ。」と子供達にもそれを見せてよく教訓し、その金全部を貯金して、主人喜代治氏が幸にして凱旋する日のあるならば、其の日までは決して此の金には手をつけまいと、送金のある度毎に御主人喜代治氏の名前で預金して居られるのである。

幸にして夫が凱旋する日があるなれば、迎へると共に此の預金を見せ、夫の留守中一心に家を守り子を守り、どんなに血みどろになつて働いて來たかを、たつた一言喜んで貰いたい、褒めてほしいとの、その心のいぢらしさ、誰が只單に名譽心として却け去る事が出來ようか。

それだけにまささん一家の生活の質素さは非常なもので、近隣の人々も之に敎へられ、「主人を戰地へ送られたまささんがあんなにつましく生活なさるのだ。自分達が贅澤をしてはまささんにすまない。」と大いに感激し、爲に生活態度を改める人さへある。

此の樣なお母さんを持つた子供達は毎日毎日を緊張した中に朗らかにすく〳〵と育つてゐる。

送金の度毎に積まれて行く預金、その度毎に尙一層奮鬪の生活を續けて行かれるその雄々しさ、見る者聞く者等しく皆感激しない者はない。

◇

談は數年前に溯る。夫喜代治氏は不景氣と勞力過剩とに禍されて、商賣道具までも手放

さねばならぬやうな破目に陷つた事がある。打しほれて働きにも行かれず終日家にある夫の前に、思ひがけなくまささんから五十圓のお金が差出されたのである。

不審と驚きに目を見張る喜代治さんに、「このお金は御不審にお思ひになるも御尤もですが決して御心配になるお金ではありません。全部貴方のお稼ぎになつたものです。之程苦しんで居るのにこんな金をだまつて殘して置くとは不都合な奴とお叱りもありませうが、さう申してはすみませんが、貴方は常平生お酒が好きでお金があれば酒にしておしまひになります。そこで私も惡いとは思ひましたが、こんな事もあらうかと日々節約して少しづゝ貯めておいたのが之だけになつたのです。どうか此のお金で商賣道具をお求めになつて子供達のために働いて下さい。」と、眞心こめて申された。

其の後喜代治氏も大いに身を恥ぢ、緊褌一番一心に働き、此の度召集を受け雄々しく征途に上られたのであるが、現在のまささんの奮鬪振を見る度に、今尙村人達の間に喧傳されてゐる嬉しいうはさである。

——西加茂郡石野第一尋常高等小學校——

四五、噫武人の妻

西春日井郡北里村小木出身陸軍歩兵准尉船橋保治郎氏は、昭和〇〇年〇月〇〇日召集を受け、〇月〇〇日には勇躍戰地に出發。以來中支方面各地に轉戰、同年十月十三日張家嬬家宅に右足盲貫銃創を受け、野戰病院入院中部下奮戰の模樣を聞くや、遂に病院を脱出し青竹を杖に「鬼ビツコ隊長」として宿縣城一番乘りの武勳を樹て、遂に十一月十二日望城崗に壯烈なる護國の華と散られた方である。

妻女きみ子さんは、はたで見る目もいたはしい程に夫出征後の留守宅を護り、よく老父に事へて孝養の限りを盡し、農事に勵み、一子の教育に意を用ひ、出でては國防婦人會幹事として出動兵の見送りに、家庭の慰問に、祈願に率先盡力し、夜更けては、か弱い女手に莚を織り、其の尊い汗と血の結晶、金五拾圓也は其のまゝ恤兵金として献納され、或は毛布の献納もして居られる。

夫戰死後は落ちる涙を押しかくし、以前にもまして各方面に活躍して居られる。

此の聖なる姿こそ誠に日本婦人の龜鑑ではある。

——西春日井郡北里尋常高等小學校——

四六、天晴れ勇士の母

丹羽郡池野村小川きく女の夫長次郎は日露の役の勇士であり、其の後當村の助役であつたが、大正十二年二月胃癌を煩つて長逝せられた。きく女は十七歳を頭に六人の子女を養育するの大任を負ひ、老いたる舅姑に事へねばならぬ身となつた。其の時長男正君は七歳爾後此の幼主の成長を頼みとして日夜家業に精勵、尾張富士東麓の田野に鍬執る貞婦きく女の姿は雄々しいものであつた。

正君は此の間に成長して小學校青年學校の成績共に優秀、孝心極めて厚く、十八歳の折奬めて弟を安城農林學校へ入學せしめ、村内の模範青年となつた。

孝養を盡せし舅姑も相次いで死去せられ立派に野邊の送りもなし、三女を嫁せしめて、

やれ〳〵一服と小安を得た時であつた。

正君は昭和〇〇年一月壯丁として甲種合格の上、〇〇隊へ入營成績極めて優等、一期檢閲を濟まして一等兵に昇進上等兵候補者となり、同年四月天長佳節の當日勇躍北支へ出征「一死報國の赤誠を盡す」と家庭へ報知して來た。後北支山西の異域に轉戰、六月三十日よりは、西楊村附近の戰鬪に參加沈勇剛膽奮戰、七月四日遂に名譽の戰死をとげた。

石堂部隊長より母の許へ宛てた戰況報告書に曰く「正は立派に働きましたかと息絶なんとする時に尋ね、部隊長より正は拔群の働であつたと聞き、母親へ正は最後までよく働いたと傳へ下さい。」とて天皇陛下の萬歳を唱へつゝ莞爾として逝けりと。

母きく女は、此の悲報を受けて涙を見せず「正も入營前國家の干城となつたことを、男兒の本懷としてゐましたから、さぞ大滿足であの世へ行つたであらう。」と弔問客へ語つてゐた多數の弔問の客人は感激の極に達したのである。

故正君の無言の凱旋の折時恰も十一月の農繁期であつたから、村葬を固辭して受けず、十二月末の村葬の折も、人樣に迷惑かけてはとて戶外に出でず、而して正君が戰死の折所持せし金員は悉皆池野小學校へ寄附し「正の仇は、尙一人ある弟に討たせるとて、目下國防婦人の一人として、銃後の務にいそしんでゐる。

——丹羽郡池野尋常高等小學校——

四七、夫の應召を勵まし病妻遂に死亡

「女は弱し、されど母は强し。」と、銃後の堅壁陣を物語る病妻の赤心報國の言葉は實に鬼神を泣かしめ、懦夫をして襟を正さしめるに十分なる力あり。長期建設聖戰下に於ける銃後の人として、自肅自戒する良藥の一つであることを信じて止まない。

幡豆郡三和村大字新村字元屋敷、農半田金作氏の舍弟、銀作氏は同村小學校卒業後直ちに名古屋市東區東新道町一丁目五ノ一に出で、〇〇業を營み、妻女しづさんとの仲に十歳を頭に四人の女兒がある。氏は溫厚篤實にして謹直な人となりで而も當今稀に見る精勵家で家運も益々隆昌に向ひつゝあつた。

「人間萬事塞翁が馬。」とか、常業第一とて孜々として精魂を傾けてゐられたが、家庭親

族に不幸が續き剰さへ妻しづさんは半歳餘も病床生活が續き、炎熱の中に甲斐々々しく病人看護から子女四人の世話まで、男手一つに家事一切を引き受け、あはたゞしく苦惱生活を續けられた。折柄の酷暑に募る病勢と戰ひつゝも看護に疲れきつた銀作氏は、一層の緊張と子女の養育に沒頭してゐられた。

突然、銀作氏に、軍務公用者としての應召令狀が下つて、勇躍任地に出發することになつた。病床に危篤狀態だつた妻しづさんは、其れと知つて、夫君の芽出度い首途に、

「私や子供のことは必ず心に懸けず、思ふ存分に天子様の御爲に、皇國の爲に、御奉公して下さい。若しおくれをとつては、末代の恥ですから。」

と、言々句々、血の出るやうな眞劍さ、妻しづさんの唇は震へてゐた。赤心報國の念より迸り出る懸命な激勵の言葉に、一層士氣を鼓舞された銀作氏は、決然として立ち、急據應召のために鄕里三和村へ歸省した。

病床のしづさんは、夫の晴れの姿を見送ると、極度の緊張の反動か苦しい息の下から

「夫に心殘りがあつてはならぬ。私の死は征く夫君には必ず知らせて下さるな。四人の子供の事は……。」

語るべく努めらるゝ唇は、急に動かなくなつて、聲が出ない。只枕邊に居並ぶ四人の子供を凝視したまゝ黄泉の客となられた。

× × × ×

三和村の生家に歸つた銀作氏は、直ちに展墓をすまして、父祖の靈前に端坐瞑目して、一死報國の誠を捧げて誓ひを終へて、ほつとすると、病妻の訃報に接したが、謹直な銀作氏は嚴然として妻の臨の言葉にそむかず、

「一旦お召しを受けた以上、陛下の兵だ。大元帥陛下に捧げ奉つた體だ。妻の死が何ぞ。後はしつかり賴むぞ！」

と、金作兄に托して、其のまゝ自宅へも立寄らずに、鎭守の宮、母校奉安殿の大前に、

「生きて再び還らず。」の覺悟も堅く、訣別の祝杯も勇ましく、一般村民の熱誠溢るゝ萬歳歡呼の聲に送られて勇躍壯途に上つた。

惜しい哉、痛ましい哉。銀作氏は心身極度に疲勞のため召集解除即日歸鄕となり、翌日

生家に急逝せらる。嗚呼何たる慘ぞや、痛恨の情轉〻禁ずること能はず。帝國軍人として盡忠報國の誠も顯現せずして地下に瞑す。父母共に先立たれし四女兒の健やかさと幸福を祈りつゝ靖國の英靈に類ふべき應召感激篇として村民の熱涙を絞つてゐる。遺兒は今、生家の金作兄に養はれてゐる。

——幡豆郡三和尋常高等小學校——

四八、銃後の妻と八臺の織機

一昨年〇月夫岩田敏夫主計軍曹が勇躍征途に上つた後に、「夫が歸るまで」の美談が一つ現れた。同軍曹は早くより父を失ひ少壯にして家を繼ぎ、父祖傳來の機業を生計の糧として努力を續けて來た。生來機敏なる頭と着實にして生氣ある氣性はよく家業にいそしむのみでなく、世は氏を在鄕軍人分會長或は敎育會役員として社會的にも立たせた。かゝる所に動員令の大命を拜し軍籍ある身のかねての覺悟とは云へ、應召に際して相當の困難のあつた事は想像に難くない。加ふるに數年前、職業上不慮の災變に合ひ、本人は勿論一家非常なショックを受け辛酸をなめ、やつと眞正面に立直つた矢先の事も併せて考へるとき、同軍曹の首途は斷腸の思ひがあつた。軍曹の殘した言葉により止むなく一時織機も止め、ひたすら時機の來るを待つてゐた。處が妻女たきさんは「長期交戰、勤儉貯蓄を叫ばれ、國を擧げての戰の時、自分が主人の殘した財產に手をかけて無意味に日を送るは主人に否國家にすまぬ。」といふ健氣な決意を以て、「主人が歸るまで」私が引受けてやらうと、主人出征當時の織機八臺、女工八人に男工一人を加へて雇ひ入れ、時々刻々進步する服飾界の機業に身を投じ、之が經營は勿論、絲の買入れから賣捌の外交まで一身に引受け、加ふるに三人の子供を養ひ、母親の孝養至らざるなく町民感激の的となつてゐる。

——中島郡奧尋常高等小學校——

四九、銃後の農事を引き受けた若嫁

高田あさ子さん(二〇)は海部郡八開村に生れ、父母の膝下にあつて、農事に精勵され、近

隣のほめ者であつた。かねて、高田耕一氏へ嫁入する手筈になつてゐたのであるが、突然耕一氏應召せらるゝに當り、爾來耕一氏宅に來り、老父常藏氏を助け、一意專心農事一切を一手に引受けて後顧の憂なからしむる樣奮然として立つたのであります。

彼女は、生來溫順にして、いさゝかの虛飾もなく、根氣力强く一度仕事を始めたならば完成の域に達するまでは、その手を緩めず、終始一貫その事に邁進する氣力を持つてゐるのです。常に後援會の人の手を煩はす事は誠にすまない。少しなりともと必ず他の農家より一歩を進めたいといふ氣持を持つて働いた。

かよわい女手に畑四反田六反を耕し、朝に星を戴き、夕に月を戴いて歸るといふ始末、本年は畑作に於て大根四百圓、切干二百圓といふ巨額の收入を算し、耕一氏在宅の時よりも收入は遙かに凌駕してゐる狀況である。この涙ぐましき努力奮鬪、その精力の絕倫なのには村人は言ふまでもなく近鄕驚嘆の的となつてゐる。

昨夏は五六十日以上、毎日々々續けて枇杷島市場に雨の日も風の日も怠らず、出荷したのでした。

或日の事でした餘り荷が重すぎて棒が折れたのを見てゐた人々は、口々に彼女の力の强いことを讃へたとの事である。

彼女は又神佛尊崇の念に厚く、朝は暗い中に起き、夕は人の寢靜まる頃、老父常藏氏の手を引いて、共に睦まじく日參に行かれる樣は、實に涙ぐましき感激のシーンであり、見るものは、彼女の尊さに打たれるのである。

この非常時乘り切りは、先づ家庭の婦女子からでなくてはならぬ。彼女のかゝる行績は實に模範的行爲として村人に稱讃せられてゐる。

——中島郡稻澤西尋常小學校——

五〇、路上の鐵屑を蒐めて

昭和十三年四月六日、金貳圓五拾錢。昭和十三年七月十九日、金參圓五拾錢。昭和十四年二月一日、金四圓。

前後三回に亘つて合計金拾圓を町役場に出頭献金を申出た岩倉町北口、佐藤つるさんは

路上に落ちてゐる古釘、鍼力の端等の鐵屑を拾ひ蒐めてはこれを賣却したものである。

正直のところつるさんはこのことあるまで殊に一顧をあたへられる何物もなかつた普通の婆さんであつたが、この擧によつて、その粗衣、その白髮まじりの蓬髮から光彩を放つやうになつて、言はず語らずの中に近隣の尊敬をあつめつゝある。つるさんには微塵色氣も娑婆氣もない。お互に口を喊じてこの無名の婆さんに敎へられるところがなければならぬ。

——丹羽郡岩倉尋常高等小學校——

五一、老の腕よく銃後を護る

安城町花の木貨物自動車業成瀨專一氏は昭和〇〇年の夏應召せられて、〇〇隊に入隊した永の患ひで今か〳〵の重態である妻女と、幼い三人の子供を殘し御國の爲めに盡くさんと誓つて勇躍壯途に就かれたのであつた。

入隊後妻女は人々の取計ひで、更生病院へ入院、加療につとめられたが、遂に四日目に

黃泉の客となられた。部隊長のお情により、葬儀には歸宅を許され、葬儀萬端相濟して歸隊後間もなく出征、彼のバイヤス灣敵前上陸に參加され、彼の地に活躍中である。

家には可憐な三人の子供が殘されたのみ。そこで七十八歳になる專一氏の實家の老母が一家の世話を引受け、甲斐々々しく働いてゐる。

祈願祭の時など何時も老母の顏の見えない事はない。昭和十四年寒中の一月十八日、國防婦人會で伊賀八幡社へ祈願に出掛けられた折は、生憎の雨降りにも拘らず、老母は傘をさし下駄ばきで三里の道をものともせず歩かれた。幾度か、「お疲れでせうから自動車に召されます樣に」と勸めても、「何大丈夫です。歩けるだけ歩きます。」と言つて仲々元氣であつた。全くその精神力の偉大なことに感じ、又老母の姿がいかにも尊く見えた。

「どんなにか御疲れになつたでせう」と心配して、歸つてすぐ訪問して見ると、夕餉の支度で一生懸命である。老母の心は戰地の息子に通じたのか、益々壯健で各地に轉戰されて居り、手當金は全部貯金して老母や子供等に送金しておられるといふ。「誠に其の心が有難い」といつて老母は涙を流して喜んでゐた。話の間にも五歳の子供が膝へ上つたり下りた

りして遊んでゐる。並大抵の骨折りではないと感激に浸らぬものはない。人々は皇軍の武運長久を祈ると共に、此の老母の身の上にも幸あれと祈つてゐる。

——碧海郡安城第一尋常高等小學校——

五二、慰安の花環

中島郡稲澤町の加島かねさんの家は、鼠捕器製造業である。力とたのむ夫は昨年の冬にはかに病歿され、長男は父の遺業を繼ぎて、其の事業を漸く行ひかけし所へ名譽の召集、直に勇躍應召し、只今も支那奥地に轉戰中である。

家には三人の子供があり近隣の人々はいたく家族の實狀を同情してやまない。

しかるにかねさんの家は、省線、稲澤驛の近くにあれば、軍用列車の通る度に、晝夜をかまはず必ず湯茶を持參して見送に出られて、出征の勇士を勵まされてゐる。自費で果物や菓子などを持つて列車の將兵を慰められることなど幾度か知れない。

尙傷病兵の乘る列車の通る時などは、生花を自からいけ、美くしき花環を自作し、必ず持參して慰められるを常としてゐる。

最愛の夫をなくし、長男を戰地に送つて、三人の子を抱へて、銃後を護つてゐるこの一女性が、しかも寒夜丹精込めた自作の生花を、傷病の勇士に捧げて慰める姿を眺め見る時誰か泣かされないものがあらうか。

——中島郡稲澤東尋常小學校——

五三、武勳の蔭に涙あり

「征く勇士知るや、既に亡き父の事を」—あゝ武勳の蔭に涙あり。勇躍皇國の輿望を擔つて晴れの壯途についた藤原、小山部隊の新鋭〇〇名が軍靴の響き諸共に、歡呼の聲に送られて祖國を出で立つ日の事であつた。

牧野(末吉)二等兵も、この一人として加はつてゐた。

征途の名殘に、臥せる父を病床に見舞つたのも、つい昨夜のことであつた。

生死の海に漂ふ父を殘して、潔く出で立つ彼は、驛頭に八事區長近藤三郎氏等の、人知れぬ涙の裡に送られてゐた。父德次郎は愛兒末吉二等兵を枕邊に送り、「末や立派になあ、御奉公するのだぞ。」と別れを告げて數時の後、永い〳〵眠に入つてゐたのである。

然し、うは言のやうにいふ。「俺が死んでも決して知らせるな。末が凱旋するまでは、末が……」と。夫の最期の言葉に妻のふでは涙をのんで、かるく肯いて見せた。「あゝもつともなことだ。これを知らせたならば、末もさぞかし勇氣をくぢく事だらう。」心を鬼にして、こみ上げる涙を抑へた。父の死を祕めて我が愛し兒の壯途を送る母を環る親族近隣の者は一時は聲をあげて泣いた。さきに末吉の兄義德曹長も江南の榮花として父に先立つてゐた。

涙かはく暇もなく、またかゝる事、だが然し今出で立つ末の爲に母はかたく涙をのんだ「あゝ武勳の蔭に涙あり」牧野二等兵は言ひ知れぬ涙の視線に送られて鵬程を越えて行くのであつた。「征く勇士知るや、既に亡き父の事を。」

——愛知郡天白尋常高等小學校——

五四、老女の赤誠

しなさんは碧海郡六ッ美村大字下三ッ木の山崎傳四郎の娘として生れ、今より二十三年前東京小石川區指ヶ谷町に西洋料理業を營み、三龍亭と屋號をつけ、女主人として日夜家業に勵んでゐられる。今年五十七歳になる老女である。

老女は非常に神佛崇敬の念篤く、今度の支那事變の起るや、皇軍將士の武運長久であるのも事變の早く治るのも先づ以つて神佛のお力を賴まねばならぬと考へられ、出生地の氏神樣やお寺へ燈籠や手洗鉢或は常花を献じて心から出征將士の武運長久を念じてゐられる。又第一線將士の後顧の心配があつてはならぬと、遺家族後援會へは多額の金品を贈つて心から出征遺家族の人々へ敬意を示してゐられる。其の他子弟の教育にはまた特別熱心で村をよくするには先づ教育よりと考へられ、當六ッ美第一小學校へも多額の献金をなし、學校では、多くの兒童、生徒の最も有効に利用し得るものを備へ、老女の德をいつまでも偲びたひと目下考究中である。

——碧海郡六ッ美第一尋常小學校——

五五、血染の日章旗

昭和十二年七月支那事變突發、夫新三郎氏の晴の應召、歡呼の聲に送られて勇躍出征する夫の見送りをすまし靜かに家へ歸つて來た千代子さん（愛知縣愛知郡猪高村大字一社一〇三番戸）は、深く心に決する所あり靜かに一室に入り、我と我が左小指を切斷し流るゝ血潮をハンカチに受け、血染の日章旗を作り大要次の如き眞心こめた手紙と共に之を戰地の夫に送つた。

男子が戰場に立つのは一家の譽でございます。又後に殘りました私は年老ひし父母を助けて何處迄も、一生懸命に働いて御留守中の御心配はおかけ致しません。

どうぞ家のことは何もかも忘れて唯一筋に皇國の爲にお働らき下さい……（以下略）。

この事を傳へ聞いた村民達は、非常に感激し銃後の後援事業も亦一段と强化された如くに覺へた。

各新聞紙も筆を揃へてこの雄々しき行を賞讃した。

千代子さんのこの赤誠こそ實に軍國日本婦人の龜鑑であり、銃後に咲いた美しき花と言はねばならぬ。

——愛知郡猪高尋常高等小學校——

五六、應召兵の妻店舗經營

昭和〇〇年九月十七日富田一氏に動員下令、同店は店員七、八名を使用し各種パン製造並に喫茶店を經營し、町内二ヶ所に亘り店舗を有する相當の商店なる爲、主人應召後の店舗の經營に付ては隣家字民に於て危惧せられた。然るに夫人靜子氏に於ては、若き身を以て其の經營に當られ、確固不拔の勇猛心を以て能く店員を督勵し、身を持する亦質實、主人應召前にも增して店舗を盛んに經營し居るは、實に軍人の妻として推奬すべきである。

全店員亦銃後國民としての責を痛感し、若き女主人に能く事へ夜中をもいとはず職務に從事孜々として店舗の經營を助けてゐる。

昭和〇〇年一月十八日主人歸還今や店主自らの指揮のもとに全店員協力一致以て銃後の

守り萬全を期して居る。

五七、お婆さんの赤誠

——幡豆郡西尾尋常高等小學校——

幡豆郡福地村大字鵜ヶ池の岡田りよさんは今年七十三歳の老婆であるが、事變勃發以來毎朝附近の通西寺に日參し、何とかして銃後の務を完うしたい、皇軍に對して感謝の誠を盡くしたいと念願してゐられた。

たま〳〵孫の一等兵茂君が召集されたのに、教育召集のみで終つたのを甚だ殘念がり、それからは毎日毎晩體の丈夫なのにまかせて自ら藁を叩き、細繩を手綯ひにして壯者を凌ぐ奮闘振であつた。

そして去る二月十一日建國祭の當日は、福地村銃後後援會へ金參圓の寄附を申出で、女子青年團主催の戰歿勇士の追悼會には、お香やお蠟燭を持つて參詣せられたのである。尚此の後も體の續く限り此の繩綯をやつて得たお金は、かうした方面に献納したいとはりきつてゐられるのである。

——幡豆郡福地尋常小學校——

五八、上等兵大谷春男の叔母

渥美郡田原町大字浦大谷七五三松氏の門口には、日章旗がひらめいて、二人の勇士が同時に征途に就かうとしてゐる。

「すみませんね、叔母さん、今日からは皇國に捧げしこの命、生きて歸らぬこの體、小さい時から育てゝ下さつた御恩返しもせないで……。」

「これ春男、何を言ふのだねお前が滿洲守備に行つてゐた時、義弟の學資にと言つて、少い小遣をさいては送金してくれたあの心、あれだけでこの私はあゝ育てがひがあつたとどの位嬉しかつた事でせう。それに二三年前のお盆だつたかな、お前が美好（叔母の實子）に、「おい、俺は今年は金がないでお前おごれやい。その代り來年は俺がおごるに。」さう言つて、二人で活動だかを觀に行つたね。そして翌年のお盆には「約束通り今年は

俺がおごるぞ。」等と笑ひながら、二人で遊びに行つた。あのむつまぢさうな有樣が目に浮んで泣けてくるよ。從兄弟としての二人ではない。眞の兄弟のやうな二人だつた。私はね「眞實の子でないから」と人樣に蔭口たゝかれるのを、どんなに心配した事か。でもお前は見事にこの母の心配を消してくれた。たとへ血すじの母でなくとも、心はお前の母なのだ。何の遠慮がいるものか。さ、元氣で行つて、無事に此の家へ凱旋してくるんだ。」

「それでもねー叔母さん」と、靴をはきながら、彼は言葉を續けた。

「親もなく子も家もない僕なんか、戰死したら一體骨はどこへ歸つて來るのでせうね。」

既に死を覺悟してゐた彼、而も天涯孤獨一人ぼつちの淋しい彼が、眞實の心の叫びであつたらう。

「何を心配するのだ春男よ、たとへ籍はどこにあらうと、小さい時から育つた此の家、お前の骨はこの叔母がきつと引受けて、佛祭りをする故に。」

あゝこの言葉この一語が、春男君には、どんなに嬉しかつた事でせう。勇士の目にも嬉し

涙が一雫。

「お願ひしますよ、叔母さん、これで安心して戰死ができます。」

「おい春男君、何をくよ〳〵するんだ。お前が早いか、俺が早いか、お國の爲の戰死なら九段の坂の上靖國の社に神として祭られるんだ。」と美好君、

「うんさうだな。靖國神社とこの家へ、嬉しいなあ。」涙をぬぐつて、ニッコリ笑ひ、奉公袋を確り握り、あとに殘す憂ひもなし。勇ましく二人の勇士は征でて行く。

× × × ×

戰史を飾る上海戰、〇〇附近の激戰に、華々しい戰死をとげた石井部隊大谷春男上等兵には、斯くも優しく斯くも健氣な心の母があつたのである。

この軍國の女性こそ、前記大谷七五三松氏妻うめさんその人である。春男上等兵の遺骨は勿論引取つて、朝夕の供養をおこたらぬと言ふ。勇士の英靈は、この叔母の家に安らかに眠つてゐる。

――渥美郡田原町北部尋常高等小學校――

五九、工場に働く銃後の妻

加賀照雄君は、養子として嫁して三ヶ月目、大命を拜し、勇躍征途につく事になつたのである。妻ひで子さんは、雄々しくも後を引受け、一家の生計を立てるために當町水谷工場へ勤めることになつたのであるが、家には元西尋常小學校に小使をしてゐた病氣勝ちの母があつて、夫の出征後の生計は益々困難に立ち至つたのである。

此の有様に町は扶助をすることになつたのであるが、親子は常に此の惠を受ける度毎に有難涙を流し手を合はせて受取り、皇恩の無窮と村人の同情とに感謝の日を送り、一日も缺かさず日參をしてゐたのである。

所が、母は遂に先頃病重つて此の世を去り、さびしくひで子さん一人となつてしまつた。けなげなひで子さんは、母の死後尙扶助を受けるのはすまないと、決然之をことわり愈々意を固めて工場に忠實に勤め克く一家を守つて町内を感激させてゐる。

所が、先頃夫照雄君は名譽の戰傷を受け入院加療中歸還を許され、二ヶ月程前鄕里に歸り目下は名古屋の工場に勤め夫婦共々に愈々銃後の守を固め、殊に夫は歸鄕後日參團に加はり皇軍の武運長久を祈りつゝある等、眞に鄕黨のほめぐさになつてゐる。

——中島郡稻澤西尋常小學校——

六〇、熱誠銃後の夫妻

海部郡八開村上丸島に八郎樣といふさゝやかな社がある。道往く人は此の社の前に此の字出身の勇士の姓名が墨痕鮮かに記され、其の前に一杯の御飯とお水との供へられてあるのを見て、感激に打たれないものはあるまい。

鬼頭靜江さん(四六)は此の村の素封家、長らく教職にあつた人だが、今は專ら青年婦女子の爲に生花、點茶、書道の指導に日も之れ足らず、近村の信望を一身に集めらるゝ方である。日支事變勃發するや感奮、身を以て衆に先んじ、風雪の差別なく黎明起床して炊事了れば直ちに、氏神社に禮拜して、御飯とお水を供へ、暫し默禱、皇軍將士の武運長久を祈

願して、一日も缺かした事のない精勵振り、其の誠意は遂に此の大字を動かして、今では主婦の大部分は朝夕祈願を込めないものはない。

此の字の國防婦人會が、献金に生活改善に、國民貯蓄に、婦人常會に、援護事業に打つて一丸となり、模範班として一村にリードするは、盖し靜江さんの献身的指導に負ふ所多大である。毎月一日十五日嚴寒膚をさす早朝、六粁の道を遠しとせず、打連れて津島神社に參拜せらるゝ床しさは涙なくては見られない。夫要次郎氏(五〇)も亦學務委員、方面委員社會教育委員として、献身的に一村の指導に從事せられ、理想鄕建設に邁進せられつゝある。

此の字の部落常會は、毎月舊十五夜と定められ遙拜默禱後必ず讀經をなし、時宜に應ずる協議をしてゐるが、一字擧つて出席し直ちに實踐に移し、議事に終る事の更にないのは誠に敬服の他なく、四大節の如き全字學校の式に參列し、或は會所に於て森嚴なる式が行はれる。其の他葬祭に冠婚に、一家の生活改善に、月毎に改善せらるゝは氏の指導によるは勿論である。

氏一家の生活は客間より臺所の隅々に至るまで、質素に合理的に整理せられ、特に廢品の利用更生に就ては一段の注意を拂はれてゐる。然も公共事業に對しては好んで多大の寄附をせらる。實に氏夫妻の如きは銃後の花ともいふべきである。

——海部郡開治尋常小學校——

青年(男女)之部

六一、友に代つて老母をいたはる

齋藤友次郎君は、昭和九年三月幡豆郡横須賀第一小學校を卒業し、後逢妻川改修工事の工員となり、碧海郡依佐美村小垣江の長澤正雄君の家に下宿してゐた。こゝで長澤君の義兄の世話で、兩人共一緒に、中央紡績刈谷工場の工員となることになつた。

長澤君は父を亡くし、六十六歳のリユウマチスのため歩行の出來ない老母と心淋しく暮してゐたのであるが、齋藤君が下宿するやうになつてから、親身の兄弟も及ばぬやうな睦まじい間柄となり、心強く樂しく通勤してをつた。

たま〳〵今次事變は勃發し、長澤君は應召することになつた病母をひかへてゐる同君は老母の處置に、はたと困つた。齋藤君は「よし母上のことは、僕が引き受ける。心おきなく安心して、行き給へ。」と激勵し、長澤君はこの眞情こめた言葉に、元氣百倍勇躍して三島に入隊した。後を引き受けた齋藤君は、老母の食事、洗濯、寢起きから、大小便の世話に至るまで、親身の子でも及ばない程の眞心を盡くした。

たま〳〵長澤君は、戰線へ出發準備中、名譽の負傷をし入院することゝなつた。この悲報に接した齋藤君は、直ちに見舞に出發した。少しなりとも旅費の節約のためとて、午前四時出發自轉車を飛ばして三島に向ひ、懇ろに見舞つて又々自轉車で歸つた。

その後も、豊かならざる賃銀の中から、種々の品物を病院に送つて慰問し、長澤君の輕快を喜び、老母と共に一日も早く平癒して君國のために活躍してくれることを祈つてゐる。

六二、あゝこの軍國の乙女

——碧海郡依佐美第一尋常高等小學校——

三十年來の餅屋「あは吉」の主人利平爺さんが、ぽつくり亡くなつて、一人息子の義雄さんが、やつと葬式を濟まし、まだ遺骨が佛前に安置してあるところへ、召集狀が來て、義雄さんは應召することになつた。後には、老母とめ婆さんとその孫の錠平(四歳)と鈴枝(二歳)が殘り、嫁のよし子さんは永い病氣のため、自分の實家へ歸つてゐるのであつた。

しかし、氣丈なとめ婆さんは、店を閉ぢ、孫二人を相手に老の身に鞭うつて、「息子よ、心配するな。孫よ、健かなれ。」と念じながら不退轉の意氣ごみで、淋しい三人の暮しが始まつた。

炎熱の八月に、はいてのある日であつた。「ごめん下さい」と、珍らしくも來客の聲。「はい」と婆さんが出て見ると見も知らぬ年のころ十八、九の娘が、入口に立つてゐた。「柘植

さんの御宅は、此方様でせうか。」「はい、うちが柘植ですが……。」と、半信半疑の老婆を見て、にこ〳〵と笑ひながら、「私――何か御手傳ひさせていただきに參りました。お洗濯か、お掃除か、お守りでも、させていただけましたら……。」「いいえ、そんな……勿體ない……。」と、不意のことに、すつかり面喰らつて、辭退したものゝ、たつての娘さんの請願に、厚意を受けることになつた。四つの孫を背に負つて、二歳とは云つても年弱で、まだ乳呑子の鈴枝を世話することは、とめ婆さんにとつて、なか〳〵の骨折りで、この娘さんの溫い世話は、非常な手助けであつた。

娘さんは、家の掃除、子供のものから一切の洗濯、整理まで、至らぬ所のない世話ぶりであつた。それから一週間たつて、またこの乙女が訪れた。とめ婆さんは、今日こそは何處の娘さんかを聞き出さうとしたが、娘さんは、笑つて一向答へず、前日の通り、何から何まで手助けして、女らしい心づかひから、婆さんの髪まで結はねば承知しない有樣であつた。

かうして、名も告げず、毎週日曜日には、必ずやつて來て骨身惜しまず手を盡くし、折

々は孫さん達への菓子まで用意して、とめ婆さんを涙にむせばせ、孫達は、娘さんの訪れるのを待ちわびるやうになつた。

その日は、「陷落だ。陷落だ。大場鎮が陷落だ！」と、湧き上る歡呼の中に全國民が興奮した當日であつた。「お婆さん、今日は大場鎮が落ちたおめでたい日ですよ。それでね、おもしろいもの持つて來たの。おねぎと、糸こんにやくと、お肉。今晩は、みんなでお祝ひしようと思つてね。錠ちやんも、鈴ちやんも、みんな一緒に、そらお父ちやん萬歳よ。」とこの日は、陷落の祝を共にせんと、珍らしく自轉車で走つて來たのであつた。とめ婆さんは、この溫い心づかひに唯感謝の涙をうるませて、拜むやうにするばかりであつた。

この後も、毎週かゝさずやつて來て、時には蒲團の綿まで入れ換へた。又戰地から便りがあれば、何度も何度も、婆さんに讀んで聞かせ、代筆をして戰地への便りを書いてやるのであつた。

娘十九の遊びたい盛りの年で、名をも告げずに、出征家族に、かほどまで眞情盡くして働く崇高なる銃後の乙女戰士は、實に、岡崎市稻熊町中屋敷中島とめさん（岡崎銀行員二

十歳）で毎日銀行員として孜々としてその職務に勵み、己が一家の生計を助けつゝ、自分の着物一つ買はずに、銃後の奉仕のために樂しかるべき毎週の日曜日を捧げてゐるのである。

——岡崎市梅園尋常高等小學校——

六三、機織に咲く二青年の花

今事變勃發と共に、令狀は、中島郡奥町五藤米三郎君にも降つた。令狀を拜した君は、滿悅征途につかうとしたが、一抹の暗雲は、君の心から取り去ることが出來なかつた。それは、「自分の家業は出機であつて、岐阜縣笠松町、正木村方面に糸を持つて行き、賃織をさせて生計を樹てゝゐるのであるが、生存競爭の甚だしい機業界に於て、自分の應召中家業を繼續するは、極めて困難であると言つて、世間の人のお世話になるのも殘念至極であるが思ひ切つて營業を中止せよう。」と決意した。其の意圖を、小店員として日頃愛撫してゐる三田村源司君（十六歳）中島十三二君（十四歳）に告げた。彼等二名は、よき主人の感化

と、青年學校の指導とにて鍛へられたのか、「大將（主人のこと）御心配下さるな、かういふ時こそ、大將に御恩返しをする時であり、又青年學校で鍛へたのを應用する時です。

御出征中私共兩名で、如何なる困難とも戰ひ、如何なる長期に亘つても屈せず、必ず繼續して大將が目出度凱旋なさるまで、今通り否今日以上の成績を收めて御待ち申してゐます。何卒後顧の憂なく、勇んで出征下さい。そんな御心配なさると、戰場で彈丸の力がにぶりますよ。」と勵した。主人米三郎君も涙にくれ、「すまん—すまん—賴むぞ。」と一言殘して勇躍征途についた。さあ、それ以後は此の二青年の緊張は一入增した。然し固き誓ひに難關の魔の手はすぐに彼等を見舞つた。先づ第一「如何に糸を用ひて織るべきか。」について充分な知識を得てゐない。そこで知人有識者を訪ねて、「大將が留守の後を引受けたから此の織方を教へて下さい。」「この所はどうしたらよいか。」と熱心に教を求め、一方前記笠松、正木方面に從前通り出機得意先を一戸も減さぬやうにと、晝夜分たず晝策奔走した。

處が、思ふにまかせぬは世の習、得意が一軒へり、二軒へり、彼等の困難も水泡に歸せんとしかけた。得意先へ「出征中」の事情を打明けて、後援を賴んだ。夫れでも尙順次減じ

て行く有様で悲痛やる方なかつた。然し彼等兩名はまだ斷念しなかつた。却つて難關に再會する度毎に益々發奮し、「我々の努力が足らないからだ。」と、矢も楯もたまらぬ二人の眼は異樣に輝いた。得意の減る原因を研究中、ふとした事から岐阜縣笠松方面某機織者が得意をとるといふ事を聞き出し、憤然として直ぐ樣笠松町某氏の宅を叩き、「出征中を固く引受けた苦衷を披瀝して、得意を元通り還すこと」を嘆願した。所が、意外にも某氏は、「主人の留守の所に居らず、いつその事、俺の家で働かんか。」と暗に誘惑をほのめかした。青年は言下にはねつけた。流石の某氏も此の固き決心に感動して「いやわかつた。君達の誠意に對し一腕を貸さう。」と遂に喜の手は固く握られて、出機先は完全に取り戻した。出征以來一年有半「主人出征中は」の不動の精神のもと、着々其の實を擧げつゝある。

——中島郡奥尋常高等小學校——

六四、寫眞で慰問

杉本次郎君はまだ二十二歳の青年である。家が文房具や菓子などを商つてゐるのでそれを手傳ふ片暇に、時々カメラを肩にした。

で、鄕黨の寫眞展には、いつも君の名が出てゐた。時には入賞したこともある。

此の頃は發奮して名古屋榮町の成田寫眞師について一心に其の技を磨いてゐる。それからもう一年近くにもなるでせう。所が今度のお正月にしばらく目で家にもどつて來られたすると、殊勝にも方々の家を尋ねまはつて

「賴むに寫眞を撮らして頂きたい。御承知の通り練習中ですから……そして御家内全員のを撮らして頂きたい。誠に御迷惑でせうが。」

と賴んでまはつた。そして撮したのは全部出動軍人の家庭ばかりであつた。

杉本君はそれを大切に名古屋へ持ち歸ると丹念に仕上げたのである。そして早速出動軍人の所に郵送したのである。

それを手にした勇士達の喜はどんなであつたでせう。戰地で家内中の者との對面である。同字から出動してゐる勇士は、皆な嬉し泣きに泣いた事でせう。

——西加茂郡擧母第三尋常小學校——

六五、打揮ふ向槌

「結婚どころではありません。まだそんなこと考へてゐたこともありません。二人の兄を戰地に送つた女の私として、弟も兵隊さんに志願させて兄弟三人共お國のために御奉公させるのが今の私の願と樂しみです。」

と、語る竹内うめ子(一九)さんは福地村大字市子、竹内淺吉さんの次女である。

長兄三雄君、次男利朗君を戰地に送り、病弱な母の看護と弟英雄君の面倒を見ながら父の片腕となり、自轉車の販賣修繕、さては相次ぐ鍛冶の注文等繁忙な家業に、男も及ばぬ活動振りである。殊にうめ子さんが汗と油煙にまみれながら、父を相手に纖くとも氣健やかに眞心こめて打揮ふ向槌のひゞきは、早朝から暮夜に及び、其の健氣な姿は村民はじめ道行く人の感激をそゝつてゐる。

——幡豆郡福地尋常高等小學校——

六六、町の戰士七人娘

敢然正義膺懲の師を起し赫々たる武威支那の天地を壓する記念すべき事變一週年もすぎて間もない八月十六日、場所は岡崎市稻熊町公會堂、娘七人番茶に咽をうるほし乍らしきりに鳩首協議の形。

「コスモス會は？」「よわ〳〵しいわ」

「ぢや巖會なら」「つよすぎるわ」「いや常磐會！」「稻熊會！」

そんな話しあひの末に、結局乙女らしい「雛菊會と」云ふ名が生れた—無邪氣なと云ふ意味を含めて。

國防婦人會や女子青年會で集る度に、「何か私たちも奉仕したい」と云ふ互の意向が今漸

く機を得て、學校へ、銀行へ、郵便局へ又は家にゐると云つた娘たちが七人、最年長者が十九—最年少が十七と云ふやさしい娘たちのこの會が結成された。

その翌日から町内の稻前神社へ七人の日參が毎朝つづけられた。八月の暑さから秋をすぎ年を越し稀な雪降りだつた今年の嚴寒にも、一朝も然も一人もかけず、娘達の眞心からなる武運長久の祈りがつゞけられた。そして一日十五日は學校の子供たちが參拜する前に綺麗に境内を清掃し、集めた松葉は夫々手わけして近くの出征された家々へ運びとゞけられた。

又昨秋の農繁期には附近の遺家族の手の足らぬ家々へ勤勞奉仕をして居り、毎週日曜日には二人づゝ交代で餘ほど離れた專法寺にある、戰死者の墓に香を手向け感謝を捧げてゐる。そして應召軍人のある毎に、學校へ勤める加藤鉦子さんが世話して必らず千人旗と千人針を贈りとゞけてゐる。

彼女たちの行事は、毎月第一土曜の夕、公會堂に集つては其の月の行事をきめ、互に知る遺家族の樣子を語りあひ少しでも喜んで頂ける樣に相談し。時々薄給ながら娘たちの小

使を少しづゝ出しあつては、惠まれぬ遺家族に匿名で贈つてゐる。

何れも婚期を直前に控へ、着物、飾から下駄の緒にまで氣を配る筈の娘達が、さうした事に何一つ美を望まず、あくまで自重自戒節約を守り、或は學校に、局に又銀行にと勤めてゐる娘たちにとつて待ちに待たれる日曜日を遊ばうともせず、神社參拜、墓參を初め各遺家族を歷訪して、美しくも尊い奉仕に專心し、銃後の守りにつとめてゐるこの雛菊會の娘たちの美擧は遺家族の誰一人として知らぬ者なく町の戰士として厚い尊敬を拂はれてゐる。

今も猶香煙縷々として娘たちの眞心が戰死者の靈を法專寺に慰めてゐる事だらう。

——岡崎市梅園尋常高等小學校——

六七、區民ラッパの起床

西加茂郡猿投村大字花本の青年學校生徒五名は、昭和十二年七月七日突如と起つた蘆溝

橋事件に、いたく衝動を受け、直ちに申合せをし毎朝午前五時（冬季は午前六時）を期して、村社八幡社に集合の上、ラッパを吹奏したる後、皇軍の武運長久を祈願することにした此の行爲は遂に、區民の感激する所となつて、現在では區民全員がラッパを合圖に、直ちに村社に集合して一齊に祈願をし、然る後、各自の作業にかゝるやうになつた。これが今日まで一日として缺けた事が無いといふ事は、洵に、銃後に於ける美談である。

——西加茂郡猿投第二尋常高等小學校——

六八、健氣な軍國女性

愛知縣東春日井郡小牧町中町西洋洗濯業林定子さん（二〇）は、幼時既に母を失ひ義理の母にも故あつて別れると言ふ不幸な裡に人となつた。

今事變勃發以來、女子青年團員として銃後奉公の誠をつくして活躍中、只一人の兄林重義君に名譽の應召があつた。令兄は喜び勇んで、後事を妹に託し大陸の戰野に向つたところが、日頃頑健な父親重三郎氏は、働き手のないあとの無理が原因してか、商用で名古屋からの歸途突如腦溢血で急逝してしまつた。一人殘された定子さんは、近隣の助けで父の野邊送りをすませたが、戰地の兄にこれを知らせるかどうか……萬一士氣を鈍らせて後れを取るやうだつたら……と度々筆を執つては思ひ返して報らせずにゐた。しかるに、兄は武漢陷落後の追擊戰中隨縣に於て壯烈無比の最期を遂げたと云ふ悲しい公報を、父の中陰も待たずに、定子さんは、受取らねばならなかつた。かくて愛する父と敬する兄を殆ど同時に失ひ、一時は絶望の淵に至らうとしたが、家の將來邦家の前途を思ひ、悲しみの裡から敢然と立ち上つた。林クリーニングの看板も新しく。小牧の町の中樞に新居を卜して雇人を指圖し乍ら、殘された家業を守ることゝなつた。人々の同情は翕然として此の不幸な女性の上に集り、新聞紙上に喧傳せらるゝと共に家業も逐次隆盛に赴きつゝある。定子さんは世間の厚情に感激しつゝ、默々として職業に專念してゐる。

——東春日井郡小牧尋常高等小學校——

六九、團風刷新

山田君(三七)は、昭和十一年四月から南陽村青年團茶屋後支部長となつて今日に及び、青年團經營上非常に努力して來た。

山田君は、資性溫厚で熱心而も總べてに積極的である。小學校を卒業してからは家業の農業に從事する傍ら青年訓練所に精勤し、優秀な成績で修了後は、近衞步兵として入營した滿洲事變には選ばれて滿洲に派遣せられ、あの滿洲の廣野で奮戰し、勳八等に叙せられ白色桐葉章をうけてゐる。事變については、あらゆる經驗と辛酸を嘗めて來てゐる。

團員の熱望によつて支部長の要職についてからは非常時局に於ける青年の指導について極めて眞摯時局の認識を深めると共に、日常生活に勤儉力行を勸めて來た。

出征軍人に對して慰問文、慰問品を送るはもとより、家族の慰問手傳に至つては、それこそ寢食を忘れ、文字通りの献身的態度で田畑の手傳から米穀調製俵裝に實に至れり盡くせりで、率先夜を日についで團員を督勵し、傍見も涙の出る程である。

今日茶屋後支部が團風刷新模範的支部であるのも蓋し山田君に負ふ所が多い。

——海部郡南陽尋常高等小學校——

七〇、八人の女子青年

額田郡河合村大字古部の女子青年團員八名は、常によく一致團結をして、女子青年團例會其の他講習會講演會等には常に手を携へて出席して熱心に受講し、常に努力を惜まず、率先して事に當り團員中の活模範となつてゐたのである。而して支那事變勃發以來は、動員下命の恩命に浴して我が鄕土を出發する勇士のある毎に、其の士氣を鼓舞する爲、古部より約四粁餘りある築野まで、然も早朝にも拘らず見送つたり、尙又同字內の應召出征家族を訪問して慰めたり、或は家業の手傳ひ等をしたりして「應召出征軍人をして銃後の憂の無いやうにし充分御國の爲に御奉公が出來る樣にするのが私達の任務である。」といつて一致協力して銃後の護りの爲に努力してゐるのである。尙昨年は家事の餘暇を見て古布を

各自持ち寄り、夜遅くまでかゝりて雑巾を作製して同村小學校へ壹百枚を寄贈したり、近くは本年一月同字内の某奇特の方より雑木を貰ひ受け、不馴れの仕事ながら、早朝より出て寒さにも、或は手より血のにじみ出づるのも厭はず、其れを薪として男子にも困難を感ずる様な險阻なる路を一束づゝ背に負ひて道路まで運び出し、之を賣却して金五圓五拾錢を得るに及び、早速同村役場に依頼し、國防献金として提出したりなど美しき行爲が頗る多い。

同村内の者は皆其の八人の行爲に對して感歎の聲を發しない者はない。

——額田郡生平尋常小學校——

少年、少女之部

七一、社殿に輝く少年の赤誠

豊橋市八町小學校の南に在る八幡社は、俗に赤門といひ、同校千七百名の氏神として全校兒童崇敬の中心となつてゐる。この社殿へ照つても降つても缺かしたことなく早朝曉天をついて寒風に吹きさらされつゝ、拜殿のふき掃除に來る子供があつた。

「至誠天に通ず」とでも言はうか。日毎に輝きを増して行く拜殿は、遂に參詣する誰でもの目にとまるやうになつて、その磨き主の誰であるかを索めてやまなかつた。神主がたづね、校長がたづね、種々しらべたづねた結果、その輝かしい行爲の主が、同校五年生山本喬之君であることが判つた。聞けば山本君は同校入學以來今日に至るまで五箇年間一日として缺かしたことなく、八幡社の清掃と參拜に懸命であつたといふ。又一面、かゝる奇特

な山本君の背後には、見逃すべからざるお母さんの隱れた大きな力のあることを忘れてはならない。山本君が入學して間もないある日、受持訓導が「日本人として生れた以上、神國日本を護るため、どこまでも敬神の念を養成しなくてはならない。」といふ意味の話を、一年生にも判るやうに話し聞かせたことがあつた。丁度その時參觀に來てゐた山本君の母も强くその言に感激し、その翌朝から、雨の日も風の日も毎朝市役所のサイレンを合圖に親子して、バケツと雜巾を持つて八幡社に出掛け、根氣よく掃除をやり續けてゐるのだつた。それが一昨年事變勃發と同時に、一層八幡社の拜殿は輝きを增して來たのであつた即ち、戰地に惡戰苦鬪を續けてゐる皇軍勇士の事を思ふと、じつとしてをられなくなつた妹の貞子さん(三年生)が、遂に兄さんの御手傳ひをすることに決意し、一段と眞劍味を增したからである。のみならず現在では、八歲になる敬子さんまでが加はり、親子總がかりで、この寒い冬空に眞白い霜を踏みつゝ、痛い程凍つたバケツの水に、やさしい手をつきこんで雜巾がけをし終ると、一同神前に整列し、國威宣揚と皇軍の武運長久を祈願する有樣は、到底涙なくては見られない光景である。それが一日や二日ならまだしも、五年間ぶ

つとほした堅忍持久の態度こそ、實に見上げたもので、事變以來、めつきり多くなつた參詣者の誰でもが、このけなげな有樣を目擊し又は語り傳へて、感謝と感激に胸を打たれない者はないのである。

——豐橋市八町尋常小學校——

七二、孝行少年肴屋

海部郡蟹江尋常高等小學校高等科二年高阪博君の家は、一家の杖とも賴む父を名譽の應召軍人として送り出した。六人の子供を抱へた母は、今後どうして家業の肴屋を營んで行かうかと惱んだ。これを見た博君は、弟（尋常科六年生）を勵まして二人で肴屋をやらうと決心した。そしてそれから、蟹江の魚市場には、この孝行肴屋のいぢらしい姿が、毎日見受けられるやうになつた。

更に、兄弟は一層家の暮らしをらくにするために、新聞配達を始めた。二人の兄弟のけなげな働きによつて、母も弟妹も樂しく日を送り、父は、喜びの涙にむせびながら、軍務

に精勵してをられる。

七三、徹夜の自轉車預り

皇軍の威武は、既に北支を制し、中支を呑み、堂々として南支を席卷せんとする昭和十三年七月二十六日、八名郡石卷村大字嵩山地内の姫街道は、晝間の中から近鄕近在より押寄せる人の波で、織るが如き雜沓を極めて居た。

これこそ清淨なる淺間山に鎭座ます靈驗あらたかな淺間神社の祭禮なので、皇軍將兵に對する感謝と武運長久を祈願せんとする人の爲めに、此の賑はひなのである。この人波は、夜に入るにつれて益々賑はしく、そのかざす燈が、點々と數里の彼方にまで長く〳〵伸びて、まことに美觀を呈し、其處此處に和やかな、夏の夜祭の情緒がかもし出されて居る。

かうした淺間神社の山麓のさゝやかな廣場に、うす暗い石油燈を揭げ、自轉車預所と認

めた立札をなし、紅顏の二少年がかひ〳〵しく立ち働いてゐる。これこそ、嵩山小學校兒童坂本茂樹、山口正虎の兩君であつた。兩君は常々皇軍將士の奮鬪を想ひ、小さいながらも我等は、我等として出來得る御奉公をしたいと考へて居たのであつた。この一念が遂にこの祭禮を利用して自轉車預りをなし、一つは公衆の爲に、一つは其の報酬を献金して、日頃の念願を如實に現したいと、この擧に出でたのであつた。

一人が自轉車を預れば、他の一人は直ちに番號札をつけ、お客に他の一枚を渡す、……目まぐるしい程の參詣者を相手に、くり〳〵と栗鼠の樣に立ち働く二少年の姿は、誠に尊い限りであつた。かくして兩君の仕事は、夜を徹して續けられた。兩君はこの尊い努力によつて得た五圓の金額を握り、明くる日豐橋聯隊區司令部に出頭、國防献金として提出した。

不眠不休は何のその、二人の面上には喜びの色が輝いてゐた。これは、この純眞な二少年の兩親のみが承知して居た事であるが、誰言ふとなしに村内に言ひ傳はつて、村民の感激の的となつて居る。

七四、家を護る銃後の少女

額田郡下山村田代加藤キヨ子さんは、高等科二年生であるが、性溫良、學業優秀、責任感强く、行に表裏なく、眞摯勤勉、常に陰德を積んでゐた。たま〳〵取り散らされてあつた所がよく整美されてあるので、誰かと聞けば、大抵はこの子のなしたもので、敎師も級友も共に感心してゐる。

今次支那事變が勃發するや、一家の柱石であつた兄淸市君は、應召することになつた。後は、母と尋常四年の弟と三人暮しで、母は病弱で、百姓仕事には堪へられず、兄出征後の家事の重責は、一層キヨ子さんの身の上に加はつた。キヨ子さんは。每朝、炊事、掃除、弟の世話など一切を、身一つに引き受けて、學校へ出かけるのである。又、下校後は、風呂焚き食事は勿論、兎の世話、藁たたき、繩なひ、草履作り、筵織り、炭俵編みなどもする。

日曜日は、薪切り、薪背負ひ、着物作りもする。又、季節々々の百姓仕事は、一切自分

でやる。作付け、施肥、草取り取り入れ、土運び、溝渫へまでやる。その他、母に代つて親類つきあひ、村のつきあひ、諸會合にも出るといふ具合で普通、大人のする仕事、男のする仕事まで一切引き受けて働き、母の看病から弟の世話をし、近隣誰一人として褒めないものはない。

——額田郡下山尋常高等小學校——

七五、八少年の日參

昭和十二年度第一學期の終業式も昨日すんで、今日から樂しい夏休に入つた七月二十五日の夜だつた。夕御飯を終へた石川勉は、庭前の凉臺に腰掛けて、うるさくつき纏ふ蚊を平手で叩きながら、今晩も父を相手に、其後の北支の樣子を熱心に聞いてゐる。つい昨日終業式場で聞いた「銃後の小學生」といふ校長先生の御話が、今甦つて父の語勢が强まると共に、新らしい感激となつて、胸に沸くのを覺えた。それに七月二十一日龜崎驛頭で萬歲の聲に送られて出征された石川正治さんの事を思ふと、小さな彼の胸にも、騷しい北支

の空模様が鮮かに映し出され、日章旗をかざして進軍する皇軍の英姿が、まざ〳〵と腦裡に浮び上つた。「此の休を精一杯眞劍に暮せ。」と校長先生がおつしやつたが、……さうだ、これから自分は御國の爲に働いてゐて下さる兵隊さんの爲に、武運長久祈願を精一杯續けて、小學生としての報國の誠を盡くさうと決心した。父にその旨を語つて外へ出た。同じ尋常五年生であり、勉と仲のよい石川寅忠の家はすぐ東だ。

「寅忠君、神様へお參りに行かう。」

と聲をかけると、何だか不思議さうな顏付をして出て來た。田圃道はまだ晝の暑さの名殘が、稻の葉先に感ぜられる程だ。道々、勉は自分の考へを寅忠に言つてみせた。一人でも多い方がよいと思つた彼等は、神様まで行く道すがら、同級の石川邦男、石川富夫、石川秋吉の三人を誘ひ合はせ、五人揃つて百餘もある石段を登りつめ、村社春日神社の神前にぬかづいた。彼等はこれから毎晩續けよう。さうして軍歌を歌ひながら行進しようと、神前で誓つて家へ歸つた。

それから一週間たつた。五人の者は自分達の日參團を、少年有志組と名づけ、提燈一張

を買ふ相談をした。其の時同級の吉田坂男、近藤昭の兩名が、自分も入れて貰ひたいと申出たので喜んで組の一員とし、一人七錢づつ出し合ひ、勉の父石川一氏の盡力により、四十五錢で提燈を購入し、殘額四錢を寅忠に依賴して、茲に日參團少年有志組が力强く生れた。

「天にかはりて不義を討つ……」

はちきれさうな元氣のよい聲が、毎夜續いた。八月十四日午後十時半頃、輝く應召の命が村人に入つた。これと共に少年有志組の軍歌が、强く村民の注意をひかずには居らなかつた。ローソク代をといつて寄附するもの、これで何でもいゝから買つてくれといつて寄附する者が出來て來た。

夏休を過ぎても、七人の心は動かなかつた。組の人數も、一人又一人と殖え、一時は二十四五人にもなつた。華かな隊列が組まれて社頭を滿したのも、氣候のよい時だけだつた野分の風の募るに從つて、組員は減じて行つた。とり殘された七人の者は、こゝに又一人の友、同級生近藤正義を得、非常に心强く感じた。

十三年の正月を迎へ、更に二月になつても元氣こそ增せ、八人の意志は小ゆるぎもしない氷結した夜道、社の杜を吹き渡る寒風、隱れた努力が捧げられて行つた。

四月になつて、八人の者は、それ〴〵六年生に進級し、義務教育最終の學年を迎へた。その頃から、夜の參拜を朝にしてはといふ意見が彼等の間にもちあがつた。夜遲くなつては、明日の勉强にさしさはり、且體の爲にもよくないからといふのが、重な理由だつた。遂に曉天參拜に變へられた。參拜の時刻は、日出前であること、人々の邪魔にならぬ樣軍歌を歌ふ事はやめて、靜肅行進を行ふ事等がとりきめられた。

學校の西隣に元本校の校長をして居られた神谷新右衞門先生(現在知多郡畜產組合長)が住んで居られる。先生は、早朝に起き武運長久祈願の爲春日神社參拜を、以前から繼續して居られた。早朝參拜に變更した少年有志組の八人は、神谷先生と每朝あふ事になつた。(早朝參拜者は、ごく少ない。)五月の或日、神谷先生が、例の樣に參拜を終へて石段に腰を下して休んでゐると、今參拜をすませた八人が、大分古びた日參旗を先頭に先生の前を通りかゝり脫帽して挨拶した。先生は每朝缺さず續けて行つてゐる彼等に對し深く感動し、

「每朝御苦勞だね。君達は隨分長く日參を續けてゐるが、やりとほせるか。日の出前のお參りはえらいだらう。私に負けない樣にやれとほせるか。」

と云ひかけると、彼等はきつぱりと、

「やります。」と答へた。

「大分その旗は汚くなつてゐるから、私が一本旗をあげよう。」

と約束して別れた。其の後神谷先生は、八人の爲に色々計畫をたてゝ實行して行つた。地圖をもちだし、徐州會戰の樣子を聞かせたり、曉の空を仰いでラヂオ體操をやらせたり、時には淸い空氣を胸一杯吸ひ込んで、精神訓話に時を過した事もあつた。かうした少年有志組と神谷先生との結合が行はれ、先生は其の後の組の育ての親となり、組員は、こゝに一段と日參報國の意を心に徹しさせて行つた。

日曜日には時々先生の宅に集り、鄕土より出征された人々の所へ慰問文を書いて送る樣にもなつた。

「今朝は寒いが、自分一人で起きて來たか、それとも家の人に起されて來たか、どんな心

がまへで起きたら樂に起されるかね。それを考へて見よう。私は六十を越したが、兵隊さんの事を思ふと、寒いのも忘れてとび起されるよ。

五分間長く蒲團の中へ入つてゐても、起きる時はやつぱり寒い。別に暖かくならないね、そこでやつぱり兵隊さんの事を思出すといゝ。さうすると、今朝も神様へお參りに行かねばすまされない氣になり、とび起きれるよ。」

とは、十二月の終りの寒い朝の話だつた。兒心に喰入つたのか、子供の眼は輝いてゐた。

又年がかはつて昭和十四年一月一日になつた。その日名刺大の紙を日章旗にかたどり、八人の名前を書いた紙が各戸に配布された。それも先生の計畫から出たのだつた。暖かくなつたら、子供と一緒に參拜後境内の草刈をしようとか、參拜の時には祝詞を讀ませようとか先生の胸の中には、新しい希望がもえてゐる。かうして先生の至誠と、少年有志組の至誠とが結合し、更に組員兒童の父兄の後援と、村人の感動とにより、少年有志組は將來に向つてすく〳〵と伸びんとしてゐる。

話は前に戻るが、昭和十三年八月廿三日少年有志組員一同は各方面からの寄附金を、一

々丁寧に記錄し、諸費用の殘高七圓七十五錢を、一錢も自分達の私用に費さず、全部東浦村藤江駐在巡査後藤氏を通じて献金し、同年九月一日付をもつて、聯隊區司令官より手續完了の旨を受けてゐる。

かくて昭和十二年七月以來今日に至る一年有七ヶ月風雨霜雪を克服して、彼等少年有志組の日參報國の歩みは續けられてゐる。因に曉を告げる鐘が白み渡つた三河の山々に響き渡る頃、春日社頭に立つならば、必ず白いいきをはきながら肅々と石段を登つて來る一行を見かけるであらう。これこそ村人を深く感動させてゐる少年有志組の八人である。

——半田市有脇尋常高等小學校——

七六、日參團長長江少年

事變第二年を迎へ、銃後後援の熱が高まり、町内の武運長久日參團が出來、更に市内各小學校の日參が行はれ、時を同じうして各町内に小學生日參團が生れて、指揮者附添ひで

見事な團旗を先頭に、「勝つて來るぞと勇ましく……」「軍の庭に夜は更けて……」と元氣よく六年生位から四つ位の子まで、源平綱につかまつて深川神社に日參する。中には町内から出征せられた勇士の名の入つた幟を持つて行く團もある。それが大てい夕飯前に出かけるから、忠魂碑前や深川神社前は、五時頃から七時頃まで、ひきもきらず參拜に來る。

市内中御幸町には、未だに小學生の日參團といふものが出來てゐなかつた。御幸町の子供等は友達が「日參に行くぞ」「今日早よ來いよ」と、元氣よく歸つて行くのに、元氣なく歸つた。上級生として責任を感じた長江朝男(十三歳)は、同級生山田龍夫君と相談して町内の下級生有志を募り二十五人の仲間を得て、七月十六日町總代加藤幸一氏方に行き、「日參團を作りたいで助けて下さい。」と願ひ出た。加藤氏は、思つて居た矢先であり、子供からの申出があつたので、雀躍して「宜しい」とばかり、直ちに團旗を染めて朝男君を團長にして、他町内なみに子供等の愛國心を滿足させて下さつた。

一方日頃の念願叶つた子供等の喜びは一通りでなく、學校から朝男君方の歸つて來るのを待ちかねて、顔を見るが早いか、「まあ行かまい」「早よ行かまい」とせがむ。出發するとと

列を正して大きな聲で歌ひはじめる。團長の命令通りはきはきと動く立派な日參團が出來上つた。七月二十四日から夏休になつた。が、日參團は相變らず元氣に規律正しく行はれた八月の暑い日もいとはず元氣で行つて、いよ〳〵九月一日から第二學期が始まる。最初の頃はよかつたけれど、運動會が近づいて來た九月の終り頃から、二十五人全部が揃はなくなつて來た。「まんだ三男君來やせんな」「うん」「呼びに行つてやれ」「よーし」「幹雄君は」「まんだ來やせん」「正一君呼びに行つて來て」と、骨折らなくては揃はなくなつた。ものにあき易い子供等は、一人減り二人減り、又それにつられて三人四人と少くなつて、十月の中頃から終りにかけては、五人か、多い時で十人位の淋しい日參團になり果てゝしまつた。自分が考へついて總代さんまで御世話になつたのだから、こゝでなくなつては、戰地の兵隊さんにも申譯ないと、町内の誰彼に日參團の大切な事を話して誘つて見たが、十一月に入つて寒さの加はるに從つて、十人は五人になり、終に三人になつてしまつた。其の仲間も寒さの加はるにつれて、又休む日があつた。そんな事が續いて十二月になつて或日の夕方、母と姉と自分の三人が此の春なくなつた父の位牌も仲間にしての夕飯時、「おつかさ

ん。俺あまあ日參やめよかしらん。」「何故や」「まあ誰も來やせんし、寒いし」と意志の弱いところを見せる。姉さんが、「朝男、品野の兄さんの事を考へて見よ。」と言へば、母が言葉をついで、「品野の兄さんぎしぢやない。瀬戸からも仰山行つてみえる兵隊さんの事を思つて見よ。寒いの暑いの、一人だけやで淋しいのなんと言つては申譯がない。それにお前おとつつあんが死ぬ時にお前の事をどんなに心配して御座つた。それを少し寒い位で大事な仕事をやめたりしては、おとつつあんにも申譯ないと思はんかや。」と言葉やさしく勵まされて一言もなく、暫くして、「まあやめやせん。一人ぎしでもやるは。」と言ひ切つて以來友達のない時は死んだ父を頭にゑがき、父と二人で參拜して、一日も缺かさなかつた。然かも雪の降る日でも、必ず四時に家を出發して深川神社と忠魂碑とに參拜し四時半に家へ歸つた。

今なほ續いて行はれてゐる中御幸日參團の誇とする表彰狀を校長先生からいたゞき、加藤幸一氏より贈られた金一封は慰問金に献金する等、長江朝男君は中御幸日參團中興の名團長である。

——瀬戸市陶原尋常高等小學校——

七七、二百の少年少女日參

西春日井郡北里村小木少年少女團員二百名餘りは、事變當初より雨の日も風の日も一日として休むことなく、毎夜七時を期して氏神様へ敬虔なる武運長久の祈願を續け、毎月一日十五日の兩日には、氏神寺院の境内の清掃を奉仕し、又揃つて古金屑を集めて献金し、或は小遣錢を節約して献金する等、銃後少年の結束した其れ等の行動は、村民賞讃の的となつてゐる。出征兵關戸哉市氏は此の美しい行ひに感激し、二回にわたつて金弍拾圓を贈られたが、此の金も直ちに献金する等、滅私奉公の赤心誠に美はしいものがある。

——西春日井郡北里尋常高等小學校——

七八、兄弟三兄童の節約献金

丹羽郡池野尋常高等小學校尋常五年生の高橋宮子さん(一三)は弟の利和(尋三)敏(尋二)と

兄弟揃つて學校の成績極めてよく、資性溫良闊達で同情心に富み、支那事變が勃發するや兄弟揃つて屑物を賣却したり、小使錢を節約したりしてお金を積み、昭和十二年七月二十三日に金參圓八拾錢を陸海軍へ分納して、陸海軍兩大臣から感謝狀を受けた。

それ以來お叔母さんから頂いたお金も入れて時々陸軍海軍へ献金してゐる。昭和十四年一月にはお金に、日曜日毎に縫つた雜巾五拾枚を添へて、名古屋陸軍病院へ恤兵用として差し出した事が、陸軍病院の係の方から學校へ通知があつて、その美擧が知れた。事變の始めから氏神樣へ日參を缺かさず、學校の養兎の飼育にも熱心で、日曜日には自ら進んで朝晝晩と三回餌をやつてゐる。兄弟揃つて感心な子供達であると村中の評判になつてゐる。

——丹羽郡池野尋常高等小學校——

七九、銃後は御心配遊ばすな

東加茂郡和合小學校高等科第二學年加藤小藤さんは、昨夏父出征するや、いじらしくも

健氣に「銃後は御心配遊ばすな」と父に誓つた。其の日より、雨の日も風の日も雪降る晨にもみぞるゝ夕べにも、鄕社神明社に弟妹三人打揃つて一日も缺かゝさず皇軍の武運を祈願し、日參をおこたらない、かくして村の人々を感激させてゐる。この小藤さんは學校の成績も良く、家庭にありては、母の片腕となつてよりよき援助をなすと共に、弟妹の洗ひ濯ぎから學校通ひの一切の世話に至るまで、他人もほろりとする程甲斐々々しく身をこなして心をくばる等、まつたく時局を子供乍ら認識してゐることに感心しないものはない。殊に毎日曜日には手作りの竹箒に心をこめて神社の清掃をなす等、總てが兒童の活範模として輝かしい行爲である。

——東加茂郡和合尋常高等小學校——

八〇、小使錢を蓄積して應召家族に送る

今事變に內田稔氏は、父と子供三人とを妻に託して、勇躍征途に上られた。餘り豐でない家庭にて、女手一つで絞の內職により生計をたてるには、相當に困難なものがあつた。

これを知つた久野美知子さん（十歳）は、大變に同情して、少しでもお助けしてあげたいと考へた末、僅かに戴く小使錢を貯蓄することにした。其の後は、お母さんのお使ひにも、今までよりどし〳〵喜んで行くやうになつた。戴いたおだちんをも貯へた。

昭和十三年六月七日までに、金二圓也が蓄積されたので、これを內田さんの家族に送つた。內田さん方では、このやさしい小慰問者の心に痛く感激した。

其の後も變ることなく、小使錢の節約に努め、昭和十三年も暮れんとする十二月十六日に、又復一圓也を送つた。一家の爲に、小さい心を碎きながら、溫い心をもつて、今もなほ小使錢の節約と蓄積に、一生懸命に努めてゐる。

美知子さんは、學力優等操行善良で、學級の模範生の一人である。

——愛知縣鳴海尋常高等小學校——

八一、慰問數十回

昭和十二年七月、日支事變が勃發するや、皇軍將兵は、勇躍聖戰に參加せられたが、筆紙に盡くせざる幾多の困苦缺乏に堪へ忍ばるゝを思へば、銃後を守る小國民として默する能はず、我が校としては、九月中旬早速慰問袋を發送したのであつた。

其の中には兒童たちが、眞心こめた書方、圖畫、綴方の作品を封入したが、たま〳〵高一男加藤直美知の作品である慰問狀が川並部隊今枝隊の川井一雄氏の手に配達された。大いに喜んだ川井氏は、折り返し感謝狀を加藤直美知へ送られて以來、今日に至る迄互に慰問し激勵し合ふ事數十回。

川井氏は名古屋市中村區稻葉地町の出身で、勿論互に相知らぬ間柄ではあるが、今は肉親も及ばぬ兄弟の如き親しさ懷しさを覺えるに至つたものゝ如く、川井氏はこの喜びを中隊長や同僚にも告げて、加藤直美知の善行を推賞して居られたが、昭和十三年九月十六日遂に學校長宛報告書を寄せられたのであつた。

學校に於ては始めて此の隱れた美談を知り、早速全校兒童を集めて語り聞かせると共に加藤直美知の善行を表彰した次第であるが、川井氏が學校長に寄せられたる報告書は次の通りである。（原文のまゝ）

拜啓秋冷の候益々御清榮の段賀し奉ります。就いては私は日支事變が發するや、聖戰に參與する大命に接し、上海に敵前上陸以來大場鎮の戰鬪、南市攻擊又南京中支戰鬪に參加し現在〇〇に警備中の一兵士であります。

思ひ出せば一昨年の九月三十日、大場鎮攻擊中貴校兒童一同よりの慰問品に接し、皆々樣の赤誠に對し心から感謝の意を表しました。私が受取りし慰問袋中の差出人「高一男加藤直美知君に謝狀をお送りせし所直美知君には今日に至るも尙激勵文慰問文をお送り下さいます事數十回なり。私も度々戰地の情況を送りまして、今日に至つたのであります。

すが、私としては兄弟の樣に親しく相成りましたと共に、私の心の中にひそんで居る事が出來ず恥しながら茲に校長先生に亂筆を以つて御一報申し上げます次第であります。

直美知君が現在戰地の兵士達を心から慰問激勵するその精神は誠に偉大なものであります。

す。その精神を打ち込んだる人、それは校長先生並に受持先生で、その勞苦いかばかりでせう。私は心から感謝致す者で御座います。

斯の如き立派な兒童は、我が懷しい愛知縣、いや日本國兒童の模範と私は信じ、將來の直美知君の前途を祝福致す次第であります。

私は直美知君の爲めに何度も〳〵も激勵せられ現在元氣潑溂として奮鬪致して居ります云はゞ私の恩人です。私は中隊長殿にも此の話を致し、或る時は直美知君の手紙を讀んで泣いた事もありました。

「あゝこれだから日本は强いのです。支那の兒童とはお話にならない程違つて居ますね。」と、先日も中隊長殿が私にいはれました。では校長先生大變くだらぬ事を書きまして相濟みませんが、どうか直美知君の立派なる精神を賞めてやつて下さい、受持先生にも宜敷お傳へ下さい。

私は名古屋市中村區稻葉地町が出身です。私の隊には御地飛島村から出征せられて居る高橋善一君、佐藤秀吉君等と一緒に死生を同じく致して居る者であります。

先は校長先生を始め各職員並に兒童諸君の御健康と御幸福を、遠い異國の地よりお祈り申し上げます。亂筆にて御免下さい。敬具

九月十六日　　戰線にて　川井一雄

飛島校校長先生殿

——海部郡飛島尋常高等小學校——

八二、事變以來の貯金

二月三日、朝の第一時の放課時であつた。教室に一人居殘つた名古路常雄（尋六）は、つか〳〵と私の前に來た。破れシャツの袖縫ひ合せて作つた財布に、お錢をギッシリ詰めて差出し、「先生、これを國のために出して下さい。」といつた。驚いて問ひ返すと、「支那事變が始つてから今日迄、毎日一錢宛貯へたお小遣で、もう國民教育も卒業かと思ふと嬉しい御恩返しに且つ戰地の兵隊さんの御苦勞に對し、少しではあるが、お報いしたいと思つて……。」と。

二年間受持であつたが、こんな心持をこの子がと、驚きながら袋を開くと、一錢銅貨で五圓三十二錢、事變が始まつてから五百餘日、一年有半、親にも語らず、友にも話さず、人知れず根氣よく蓄へたのかと思ふと、數へながらに熱い涙をそゝがずには居れなかつた

常雄はいつも日參團旗の下に加つて、晴れやかな元氣な顏で、出征將士のために武運を祈り續け、氏神である宗像神社の境内へは等をたづさへ、早晨から掃き清めて奉仕の仕事にも骨折つて來た。あの南京陷落の日であつた。大阪毎日新聞社は、その紙上に「雨の日風の日も日參した四少年」と題し、日參に、神苑清掃に、又町内出身將士慰問にこれぞ模範少年と稱へ、四名の寫眞の中に彼を加へて表彰せられたこともあつた。

——名古屋市上名古屋尋常小學校——

八三、社頭に祈る三少年

萬燈山頂の曉雲やうやく白む頃、日毎に村社神明社の社前に額く三人の少年がある。雨

の日も雪の日もいとはず社前にあらはれる此の三少年こそ、三和青年學校普通科一年手島恭平、三和尋常高等小學校五年鈴木鐵夫、同手島弘平の三君である。彼等は一昨年日支事變勃發するや勇躍征途に向ふ鄕土の勇士を見送るにつけても、又白衣の勇士の姿を見るにつけても、或は護國の神として戰死せられた勇士の葬儀に參列するにつけても、勇士の武運長久と戰勝を祈り、且つ事變の一日も早く終結せんことを願ふ心の湧き出づるを禁ずることが出來なかつた。自家や親類に一人として應召軍人を出して居ない彼等ではあるが、愛國の一念より彼等三人は、合議の上一粁餘り離れた氏神樣に日參を續けようと計つた。

かくして彼等は、一昨年十一月二日赤誠の第一歩を踏み出して、今日に至る迄一年三ヶ月餘り、尙一日も缺かすこと無く祈願行動を續けるのであつた。此の間には幾多の苦難がこの行動のさまたげをしたものだつた。それは、今冬の殊の外の寒氣に三人が强い風邪に患された。事もあり、霜凍る早朝の寒氣に起出づる心もにぶつたり、强風傘をも奪ふ雨の日も二度や三度ではなかつた。其の他幾多の難事を踏み越え打克ち、初心貫徹に一路邁進して、一年有餘互ひに勵まし合つて今日に至つた。此の事何時しか校友の知る所となり、

ついで先生の耳にも入り、全校兒童の前に發表されるや、一同は此の三少年の美しい行動に强く感激した。其の後至る所に日參の兒童を見受けるやうになつた。然し、ゆるみがちなのは人の常として永續するものはなかつた。自發的心情に一事貫行の信念に燃えた彼等三人は、あらゆる苦難や風評を外に、祈願行動を今日尙續けてゐる。而して彼等は事變の終結をみる迄は、斷じて此の初心を挫折しないと、强く受持訓導に語つた。因みに三名共級中の模範生であり、特に鈴木鑑夫君は四年五年を副級長として級友の信望を集めてをり更に事實調査するに次のやうな佳話があつた。

彼鐵夫君の兄誓君は、三年前僅か十八歲の若年で以つて現役志願をなし、榮ある軍人として入營する日を待ちわびてゐたのであつた。然し不幸にして入營數箇月前、急病に依りあの世に旅立つたのである。それに次いで今日の支那事變は勃發したのである。此の時愛弟鐵夫君の胸には、亡兄の意志を繼ぐべく一つの決心がいだかれたのである。それが先に述べた日參となつて表はれたのである。あゝ美なるかな鐵夫君の心情。

——幡豆郡三和尋常高等小學校——

八四、鰯賣り兄弟

安城第一尋常高等小學校六年生の石川イッ子の家庭は貧困の上、二年前に母を亡ひ、年老いた父は子供五人をかゝへ、或は人夫となり、時には鰯賣りとなつて、貧しい其の日〳〵の生計を立てゝ居た。

母の死後、イッ子は一家の主婦代りとして六歳の妹の面倒をはじめ家事一切を世話する姉を援け、弟妹をいはたり、學校では勉強に運動に或は清掃に、常に級友に先んじて行ひ學級兒童の模範となつた。

昭和十三年、事變下の暑中休暇に弟等（尋四、尋一）と相談して、朝食前に鰯を賣り歩き其の純益を貰ふことを父に願つた。許されるや大喜びで夜明け前に弟等と共に起きて荷拵へを終へ、乳母車に積み或は擔つて、「鰯やゝゝゝ」の呼聲も元氣に、あの町この村と、豫定數賣りつくすまでは、空腹も忘れて賣り歩いた。風の朝雨の曉をも物ともせず、根氣よく賣り歩いた。遂には近郷近在に「鰯賣り兄弟」の名を知らないものがないやうになつた。

かうして夏休も終り、第二學期が始まると、休中の鰯賣りの利益金參圓六拾五錢を、皇軍將士慰問として献金した。

——碧海郡安城第一尋常高等小學校——

八五、少年の牛乳配達

鳴海町字德重寺島鍵重氏の二男嘉造君（一六）はまだ夜も明けない內に起床し、牛乳の殺菌をする爲に火をたき、殺菌が終るとびんに詰め變へて、水汲み、牛小屋の掃除と順次に行ひ荷を自轉車につけて、薄ら寒い中を午前六時頃家を出るのである。

鳴海莊から丹下の方へと配達して、學校へ來るのは授業の始まる少し前である。學校にては一心に勉强し成績も良くて皆を感心させてゐる。

授業が終れば直に、朝自轉車を預けて置いた作町の近藤自轉車店から自轉車で中島の近藤久義方に預けてある牛乳を貰ひ受けて、六時頃迄に配達し、家へ歸れば空びんを整理したり弟妹をいたはる等して、親の手助けをして雨の日も風の日も一日として厭ふ事なく、

牛乳を配達する事二ヶ年の長きに渡り、銃後國民の手本ともすべき行ひは涙なくして見る事が出來ない位である。

——愛知郡鳴海尋常高等小學校——

八六、健氣な少女

鳴海尋常高等小學校兒童の小島てる子さん(一六)の家は母が亡くなられ、女手としては、てる子さん一人である。

それに、兄は事變と共に名譽ある應召者として出征されたので、てる子さんは兄さんを心から勵まして送り出した。然るに幾何ならずして他家に嫁入られた母とも賴む一人の姉が病死された。けれども健氣なてる子さんは、此の事を戰地の兄さんに知らせず、一層家事や老父の孝養に專念した。所が不幸はそれのみならず殘つた一人の兄さんさへ病魔の侵す所となり、八月終に死亡せられた。氣丈なてる子さんは、父と相談して此の事さへも、戰地の兄さんに知らせず更に孝養を盡くし三人の冥福を祈りつゝ戰地の兄さんの武運長久

を祈り且つ家事に勵み又學業にいそしんでゐる。

——愛知郡鳴海尋常高等小學校——

八七、二人の兄を聖戰地へ

鳴海尋常高等小學校兒童の尾關美子さん(一四)の家では、事變勃發と共に一家の支柱であつた兄さんが應召されて以來、中支に活躍中の所、又もや本年一月、次の兄さんがめでたく入營され、家には年寄つた父と母と美子さんのみとなつた。所が父は十餘年來、病氣勝ちの體の上母や美子さん相手に老の身に鋤鍬取つて敢然銃後の護りに精進し、當然うくべき扶助をも辭退してゐる有樣。其の間美子さんは父母の手傳ひのため、或は畠に、或は炊事に絞內職にと專心働き、餘りゆたかでない家計を助けてゐたが、此の頃は父の働きも思ふ樣に行かず、終に京都に奉公中の三番目の兄も歸鄕し、工場に務める樣になり、早朝から出勤するので、母を助けて兄を送り出し、其の後始業前まで絞內職に餘念なく、時間が來れば學校にかけつけ、眞劍に勉强、その他日參團にもよく骨折り、小さい子の世話から

兵隊さんへの慰問に至るまで進んでやる。兩親始め一家揃つて實に感心な人々である。

——愛知郡鳴海尋常高等小學校——

八八、父に後顧の憂なからしむ

鳴海尋常高等小學校尋常六年兒童の伊藤義昌の父は昨年七月應召入隊した。君は父の留守中母を助けて一家を支持せんと志し、本町の岩川葬具店に勤め毎日授業後から夕刻まで働いた。

夏休になると父の勤め先きであつた名古屋合同運送店熱田支店の給仕に轉勤して、雨の日も風の日も忠實に働き續けたので、支店長が非常に喜び永く勤務する樣に申されたが、二學期の授業が始るので九月から再び近くの岩川葬具店に歸つて前にも增して良く働いてゐる。

父上が大命を奉じて、いよ〳〵壯途に上るに當つて後顧の憂を殘さなかつたのは、一に君の健氣な此の活動があつたからで、其の行爲は寔に銃後小學生の模範とするに足るものと思ふ。

——愛知郡鳴海尋常高等小學校——

八九、お菓子も儉約して銃後献金

小學校に咲いた三人少女の愛國佳話がある。大野美代子さん、大橋日出子さん、淺野とし子さんの三人は同じクラス(尋六)で、揃ひも揃つて成績もよく、また大の仲よして級の模範生である。武漢の陷落は、これら三人の少女の胸にも强く映じた。この三人は武漢三鎭の完全占領の報を聞くや、その日から「兵隊さんの御苦勞を思ふと私共もじつとしてゐられない兵隊さん有難う……。」と感激に浸りながら「今日から小遣錢を儉約しませう。紙を大切にしませう。古針古釘屑鐵を集めませう。」と三人が固く約束した。

それから一ヶ月あまり經たとき、早くも、一人一圓餘の貯金が出來たので、この程「僅かですが出動部隊後援會へ送つて下さい。」とて擔任訓導のもとへ赤誠あふるゝ左記の手紙

を添へて、金三圓を差出した。其の後第二回第三回と献金するために可愛い努力を續けてゐる。

皇國のため一命をすてゝ勇しく働いてゐて下さる兵隊さんの御苦勞を思ふと、いくらお禮申上げても足りません。またお留守を守つてゐらつしやる方々の事を思ふと、私どもはじつとしてをられません。私どもも兵隊さんに負けないやうに出來る限りの力をつくし、堅忍持久私共の務を盡くさうと思つてゐます。この度あの漢口陷落にはどれ程兵隊さんがお難儀をなされた事でせう。私ども三人はあの日から相談しました。「毎日々々お小遣を貯めませう、紙もごく大切にしませう。學校へ行く時も歸る時も、またお使に行く時も、古釘一本でもお國の役に立つものは拾つて集めませう……。」とかたく約束しました。それからは弟がいかにも美味さうにお菓子をいたゞいてゐるところを見ると、「私もたべたいなあ！」と思ひましたが、「いいやお菓子の代りに一錢でも貯金箱へ入れようか〳〵してゐられない。」と心をはげましました。十二月になりましたので貯金箱を開けましたら、嬉しいことに一圓を超してゐましたので、早速相談したお友達と一圓づゝ出し合ひ、出動部隊後援會に差出す事にいたしました。先生どうぞお届け下さい。

——海部郡津島第一尋常高等小學校——

九〇、讀み終つた新聞を集める三少女

幡豆郡吉田町宮崎里組は、婦人の活躍めざましく、本町が教化町となるや、率先して婦人常會を開き、以來他部落の模範として終始してゐる。本年二月教化三周年記念式に於て表彰の榮譽を受けたのは當然のことである。

かゝる婦人に教養せらるゝ子女の善良なるもまた當然とは言へ、吉田尋高高二早川愛子小塚二三代、林ひろ子の三君の美行は、非常時第二國民の範たるに足るものである。

支那事變勃發以來當部落出征軍人の許に各家で讀終つた新聞紙を發送することになつた三君は早朝に部落内をかけめぐり、新聞紙を集め常會長の許に持參し發送の手續を終へて登校する宮崎から學校までは四粁程あり、かなり遠い通學路に拘らず、己の任務を果して

は殆んど遲刻することなく登校する。然も開始以來二年一日として休むことがない。戰地にある鄕土出身兵は彼女等のおかげで毎日新聞が讀めるわけで、そのよろこびは如何程であらうか。感謝の手紙は數十通を數へる程である。

昨年二月以來實施されてゐる愛國貯金の集金も、進んで引受け各分擔區域を定めて眞面目に實行し常に滿點の成績を擧げてゐる。

——幡豆郡吉田尋常高等小學校——

九一、手洗所の清淨

幡豆郡吉田町第一區在住高二粕谷豊、水鳥了一の兩名は、毎早朝吉田神社に參拜皇軍の武運長久祈願をしてゐるが、昭和十三年九月頃のことである、手洗をしようとした處が、手洗所のあまりに汚れてゐるのに驚き、兩君力を合せて掃除し、清冽な水を一杯滿たして神域を辭した。

以來毎日缺かすことなく今日に及んでゐる。ために、參拜者は清淨な水で手を洗ひ一入

淨化された心で神のみまへにひざまづくことが出來る。勤勞奉仕の聲高く要求せらるゝ今日かゝる少年こそ次第國民の模範とすべきものであらう。

——幡豆郡吉田尋常高等小學校——

九二、恩師の武運長久祈願

名譽の召集令が我校の石原先生に下り、續いて同じく平松訓導に下令され、二先生とも北支の野に轉戰さるゝや、その教へ子たりし、三、四、五、六年兒童は、ひたすらに恩師の武運長久を祈願し、毎日の學校生活にその緊張振りも窺はれ、慰問の手紙、圖畫、書方綴方等絶えず野戰の先生の許へ發送しては、銃後と戰線と、恩師と教へ子と溫き眞情の交流に愛國の血潮をたぎらしてゐる。殊に一月二十日には、六年男子一同福武村七宮樣の巡拜をなし、折からの薄曇りの寒空に日の丸辨當を携行して、一日中數里の山道を歩いて恩師の武運長久祈願は實にけなげにも雄々しと言ふべきである。

——北設樂郡田小木尋常高等小學校——

九三、記念の事變戸棚

半田市乙川小學校では、聯區內の醫師堀田俊造氏が、一昨年十月以來毎月愛國切手（四錢）を五十枚宛の割で寄附して下さるので、全校兒童から乙川出身の勇士達に、なつかしい鄉里の便りを送つて、勇士達の慰問をしてゐる。

勇士達も、可愛らしい小學兒童の慰問狀に感激して、一死奉公の誓を披瀝した武夫の陣中便りは勿論のこと、支那紙幣、彈丸、繪ハガキをはじめ、兒童の參考になるやうな物品が次から次へと兒童宛學校宛に舞ひ込んで來るので、學校ではこれが參考品を戸棚に陳列し、夙夜兒童訓育の最も生きた教材として取扱つてゐる。

これは堀田先生の美擧と、兒童の純眞な慰問狀と、第一戰勇士達の優しい鄉土愛とが生んだ事變戸棚として、區民の間に感激の話題となつてゐる。

——半田市乙川尋常高等小學校——

九四、香花を捧ぐる少女

丹羽郡山名尋常小學校六年女兒二十六名は、昨年五月頃、本事變に戰死せられた方々の靈をお慰めすることを、互に相談し合つた。それ以來毎日交替で、二人づつ授業後、學校や家庭で作つた花や線香を持つて、參拜を續けてゐる。どんな强い風の日も、雨の日も、この二人の女子の姿を、墓地に見ない日はなかつた。

女兒達は、先づ墓地に到り、境內を清掃し香花を供して墓前にぬかづき、戰死者達に感謝すると共に靈を慰めるのである。

此の純情に感じて、村の人々も其の墓前を通る時、一人として頭を下げないものはなくなつた。

——丹羽郡山名尋常小學校——

九五、銃後赤誠不滅の金字塔

昭和十二年七月支那事變勃發世間漸く緊張度を增し、我が鄕土部隊にも動員下令の日、八町校六年近藤錬二君、加藤常雄君は率先時局を想ひ、氏神神社である縣社神明社に皇軍の武運長久祈願日參を始めたるに、同町學友も亦この善行に賛同し、こゝに八月を期して旭町一二番町少年少女日參團の結成を見る。當時團員は凡そ五十名、其の後季節により多少の變動はあるも、雨の日も、寒風荒ぶ雪の曉も、早朝（六時―七時）町内空地に集合、六年兒童リーダーとなり、「祈皇軍武運長久」の長幟を先頭におし立て、隊伍堂々時には軍歌を時に日參團歌を歌ひながら、縣社神明社にいたりて整列、代表兒童と共に祈願文を奉唱、歸途練兵場神武天皇御銅像に參拜して町内にもどりて解散、今日に及ぶ。

この善行は、他町内兒童にも深き感動を與へ、其の後續々と日參團が出來、現在は校下各町殆んどその結成を見るに至つた。本團こそは校區内の魁であると共に、本市内に於ての最初のものである。

尙我が鄕土部隊の激戰死鬪全日本を搖り動かした大場鎭陷落から、上海占領、南京攻略の戰酣なる當時は、之等團員達もたまりかねたと見え、いつの間にか申し合はせて、神社參拜の途上、出征譽の勇士を出した家庭を一軒づゝ訪問、玄關前で熱誠こめた萬歲を三唱して家人を激勵、感謝を捧げて近隣賞讃の的となつてゐたこともあつた。

更に之等團員の純情は遠く戰線にまで通じ、幾多勇士を感激せしめてゐる。一勇士の如きは、この善行に感激のあまり、金一封を學校に送り來られしこともあり、其の他感謝感激の手紙は多數に及ぶ。

年を經て愈々盛に、團員達の淨財によつて求め、又自分等の手で一字づゝ寄せ書して作られた由緒深き日參旗のある限り、いつ〳〵までも續けやうといふ小さき團員達の心にも、長期抗戰の決心を見るは誠に賴もしき限りであり、之こそ銃後に於ける赤誠不滅の金字塔である。

――豊橋市八町尋常小學校――

九六、汗に報いられた謝禮の献金

中島郡大和村大字妙興寺の小學校兒童を以て組織する自治會は支那事變勃發以來同字に鎮座する氏神五ヶ所に日參をなし、ひたすら皇軍の武運長久を祈つてゐた。

昨年冬以來の打續く嚴寒と數度の降雪のために、砂利の敷いてない田舍道はいたく泻つき午後は泥濘の川と化し、歩行の困難言語に絶し日參も出來兼ねる狀態となつた。

それは一月十五日（日曜日）の朝であつた。自治會員は子供ながらに相談して安野工場に工場主を訪ねた。

そして工場主から石炭の燃殻を貰ひ受け十幾臺のリヤカーで之れを運んで道路に敷詰めた。流石の惡い道も見る間によくなつて、子供達は思はず萬歳を叫んだ。

道がよくなつて喜んだのは日參をする子供ばかりではなかつた。字中の總ての人の喜びとなつた。特に同字に於て荷馬車をひく木村金右衞門氏、木村關三郎氏、森德次郎氏の三氏は兒童の此の擧にいたく感激し、謝禮の印にと金參圓を自治會に差出した。

自治會員は三氏の好意を大變有難く思つたが、自分達の日參する道を自分等の手で直ほすのは當然のことで、謝禮を受けるのはお恥かしいと、其の儘其の足で國防献金にしていたゞきたいと其の筋へ願出た。

——中島郡興道尋常高等小學校——

九七、日參子供の會

幡豆郡福地村大字鵜ヶ池子供の會は、昭和十二年七月十九日を以て創立され、同字通西院寺代早川大信氏が主宰してゐる。大體小學校在學兒童を以て組織されてゐる。設立以來毎朝日の出頃に喇叭を吹きならして村人の眠を覺し、子供を集め、寺院參拜後一同打連れて神社參拜を行ひ皇軍將兵の武運長久を祈願し、其後手分して神社及び寺院境内の清掃を行つて解散する。

毎週土曜日には夕食後寺院に集合して約二時間佛話、おとぎばなし、お經の指導等を行ふ。

尙神社境內淸掃に依て得たる松葉は之をよく保存して適當な時賣却する。そして得たるお金は一切村の銃後後援會や國防献金に致してゐる。

——幡豆郡福地尋常小學校——

九八、感心な少年團

昭和六年九月十八日滿洲事變勃發するや、之を期として、西加茂郡高橋村大字南古瀨間少年團が生れた。それて武運長久祈願の爲に、神社參拜をする事や、毎月一日、十五日には神社の淸掃をする事などを申合せた。

そのうちに、此の少年團の熱心なる行爲には、村人も感心して、何とか一層勵ましてやらうではないかとの話が起り、遂に其の寄附で立派な團旗も出來た。

爾來、曩の申合せは、絶える事なく、繼續せられて來たが、偶今次の支那事變起るや、この少年團は、日參を思ひ立ち、今日まで雨の日も、風の日も、喇叭を合圖に集合して山上高く鎭座せらるゝ志賀神社に參拜し、未だ嘗て一日もこれを缺した事がない。

此の純眞な子供の感ずべき行爲は、村人の稱讃の的となつたのみならず、其の熱誠は遂に人を動かし、他にも日參する者が、一人殖え、二人殖えして、今では其の數も可成あるといふ。

尙、今事變に際し、少年團として、廢品の蒐集を行ひ、其の賣上金を軍資金として献納し大藏大臣から感謝狀も戴いてゐる。

斯くてこの少年團は、今後もながく非常時小國民としての赤誠を、現して行く事であらう。

——西加茂郡高橋第四尋常小學校——

九九、幼き誓

昭和十三年七月二十五日、事變下第二回の夏休を迎へるに當り、八名郡嵩山尋常高等小學校長彥通學團では、部落內の公會堂に團員全部集合自治會が開かれた。小部落なので團

員と言つても僅か三十名足らずであるが、會議はどうして、仲々眞劍なものである。

種々夏休に於ける實踐要目が決議されて行つたが、特筆されるものに二つあつた。一つは皇軍將士に對する感謝と武運長久祈願としての氏神樣へ日參のこと。二つには、夏休中に小遣錢を儉約して、たとひ一錢でもよいから國防献金にと言ふのである。之は正副兩團長の合議による提案であつたが、全員の大賛成裡に決議されたのであつた。

方法として

一、毎朝五時に氏神樣社頭に集合參拜のこと。(但し晴雨に拘らず。)

一、献金方法として、公會堂内に献金箱を設置して、日參の時、それに献金すること。

(但し之は强制的にあらず。)

實に小さい兒童の集りであり、幼ひ子供等の誓であつたけれども、純眞なだけに一生懸命な眞面目なものであつた。そして即日實行に移されて行つた。曉の社頭に揃つて打つ小さな拍手の音。この響にこそ、燃ゆるやうな眞心がこもつて居る。何と涙ぐましい光景であらう。

又田舍の事である。兩親たちから與へられる小遣錢はほんの僅かである。それを儉約して浮かせる献金。それでも一錢二錢と日に日に殖えて行つた。かうした事が、部落内より二人三人と應召者の數多くなるに及び、益々拍車を加へられるに至り、遂に部落の人々の感激する所となり、大人の誰彼れがこつそりと、子供の献金箱に投入れて置くと言つた樣な麗しい情景まで描き出される樣になつたのである。

かくして第二學期が始められると、正副團長は献金箱を開いた。僅か三十名足らずの兒童の赤誠の結晶は貳圓六拾八錢となつた。そして第二學期始業式當日之を學校長に提出した。その熱誠溢るゝ行爲は、始業式當日全校兒童に話され、早速献金の手續を取つた。

爾來、雨の日も、雪の日も紅葉の樣な手を合せての祈りと、お小遣の節約とは續けられて居る。「僕もやらう。」と言つた部落も一つ殖え、二つ殖え、てこの麗しい情景は學區内の何處にでも見られる樣になつた。

——八名郡嵩山尋常高等小學校——

一〇〇、小さき手で社前に額づく

昭和十三年七月頃から、村社八幡神社の境内が毎朝美しく掃き清められてゐるやうになつたが、それを誰がやつてゐるのか少しくも判明しなかつた。それがふとした事から粟代の中村組及小田組の幼ない小學生が誰言ふとなく、未明に起き出で、小さい手で社前に額づき、皇軍勇士の武運長久と郷土出身兵士の安穏とを祈り終つてから、共々にその境内を掃き清めてゐるのだといふ事が知れた。

この團は全く子供だけの自發心から出たもので、冬のどんな寒い朝でも繼續され、今も尚實行されてゐる。

——北設樂郡粟代尋常高等小學校——

愛知縣銃後美談集 第二輯

定價 金四十五錢

昭和十五年五月二十五日印刷
昭和十五年六月 一 日發行

著作者 愛知縣教育會 名古屋市西區下長者町四丁目九番地

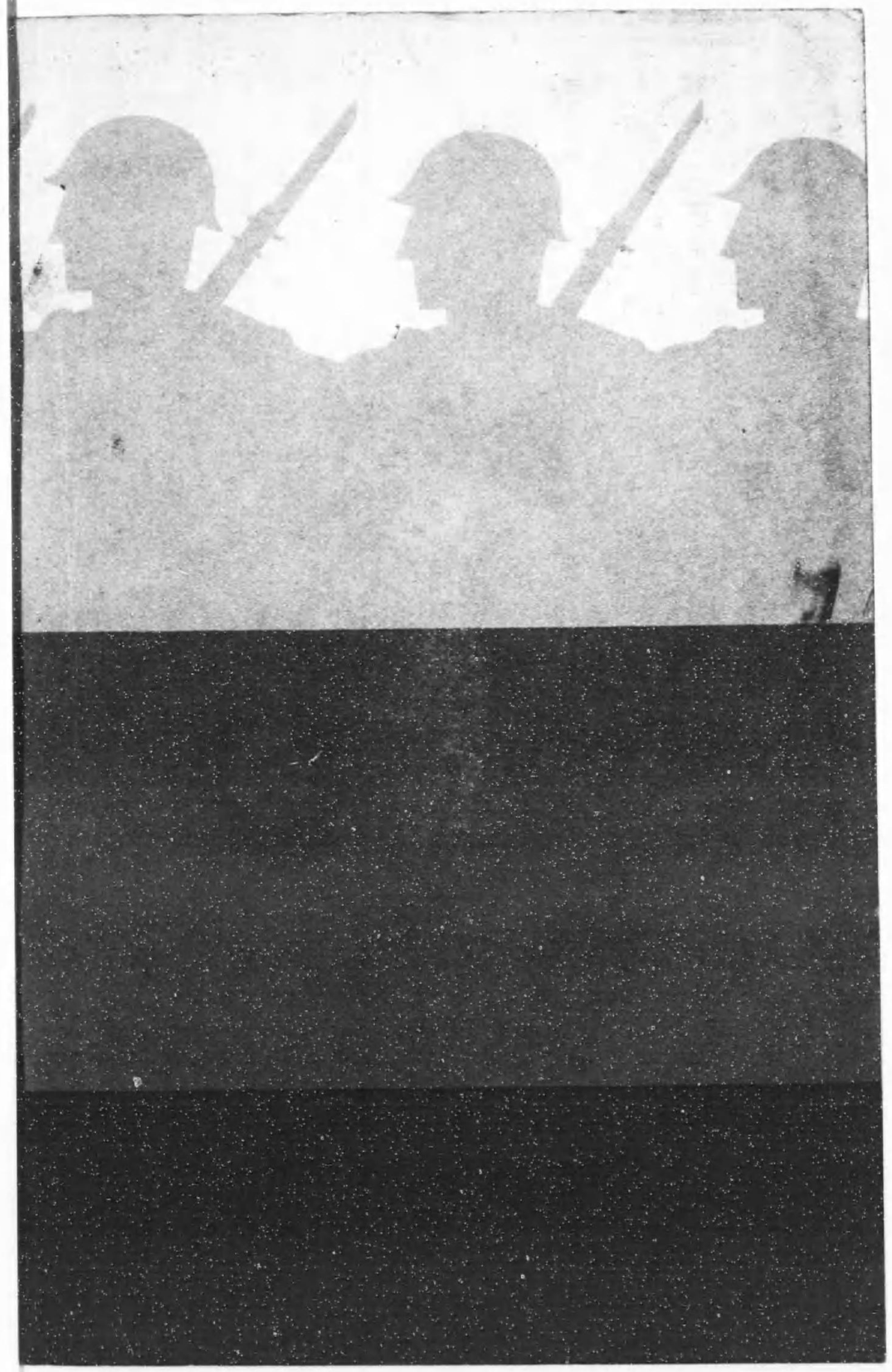
發行兼印刷者 川瀨代助 名古屋市中區南久屋町四丁目三番地

印刷所 名古屋印刷株式會社

發行所 合資會社 川瀨書店 名古屋市西區下長者町四丁目九番地 電話本局一七五・三四五番 振替名古屋五六三番

不許複製

398
492



終